

第 39 回 歴史リレー講座「大和古物の世界」 岡本 彰夫氏 (H29.12.10)

大和は古くから歴史文化がとぎれず、人から人へ祭礼や技術が確実に伝えられてきた土地。その地名を冠した古美術品は大和古物もしくは奈良古物以外に存在しません。ところが、物の価値観が一変した明治初期には貴重な品が市場に流出してしまい、これを教訓に「古器旧物保存方」という法律が制定されました。この頃に東大寺回廊で開催された奈良博覧会が現在の正倉院展の始まりです。その際、政府は地元民に古物の写しを作らせ修理もさせていましたが、高度な技量を持つ職人が大和にいたという事実は称讃に値します。

室町時代以前の古物研究は今も盛んですが、以降の美術工芸品となると見向きもされません。このままだと近世・近代の貴重な品の所在はうやむやになり、ひいては現代と繋がらなくなってしまふ…。そう危惧した私はかつて、そういった作品に光りを当てるべく研究を呼びかけました。例えば、京都周辺の文化人を収録した『平安人物志』には江戸時代に活躍した大和の画家、内藤其淵（とえん）の名が見えます。鹿の生態を描かせたら右に出る者はいない程の人物です。

さて、奈良では古くから木彫りの人形が「奈良人形」として親しまれており、明治に入って男爵となった水谷川忠起（みやがわただおき）がその風合いから新たに「一刀彫」と名付けました。まるで一刀でサッと彫ったような清らかな仕上がりは人が触れていない、すなわち穢れていないことを暗示しています。もともと、奈良人形は人が愛玩するものではなく、神様にお供えするものだからです。同じように、大和琴（6弦）の絃を支える部分、神事に使用されるという理由から象牙ではなく楓が使われています。ちなみに、忠起は最後の関白近衛忠熙（ただひろ）公の子で、興福寺一乗院へ出家したのち最後の別当を務めました。NHK 大河ドラマの主人公、天璋院篤姫の戸籍上の兄にあたる人物でもあります。

奈良人形の発祥は垂仁天皇の時代まで遡ります。『日本書紀』によると、天皇の后が亡くなったとき、天皇が残酷な殉死制度に替わる方法を野見宿禰に意見を求めたところ、宿禰は埴輪を作って埋葬することを献言しました。これが埴輪の始まりであり、功績を認められた宿禰は土師氏と改姓します。のちに土師清人が朝廷に改姓を申し出て菅原氏となりました。天神様で有名な菅原道真是清人のひ孫です。菅原は現在の奈良市に見える地名で菅原神社や菅原寺（喜光寺）があり、近くには伏見という地名があります。伏見稲荷で有名な京都の伏見は菅原一族が平安京遷都に伴い京都に移り住んだことにちなみます。

平城宮跡からは奈良人形のルーツと思われる多数の形代（かたしろ）が出土しています。また、五穀豊穰と人々の平和を神に祈る春日若宮おん祭りと奈良人形は縁が深く、その中の田楽能で使われる花笠には奈良人形が飾られます。現代の結納で使われる蓬莱飾りは、この花笠が姿を変えたものです。大和は能の発祥地と伝えられ、田楽能は世阿弥や観阿弥にも影響を与えたといわれます。奈良人形の起源は、「おん祭りと同時説」が以前よりあったものの、確証となる史料は発見されていません。ところが、『鎌倉遺文補遺 2』に収録されている興福寺の儉約令「治承之新制」の中に「…半土人形（焼き物）、板人形（奈良人形）…」という記載が見つかりました。起源は治承年間（平安時代）であることがこの文書ではっきりしたのです。

奈良人形を近世から伝えてきたのが春日有職檜物師岡野松壽家です。神事祭具製作の傍ら余技として奈良人形を作り、松壽の号は明治まで 13 代続きました。ただし、初代木白（もくはく）の印があっても彼の作品とは限らず、個人としてよりも岡野家の一員として製作したと考えられます。江戸時代に活躍した森川杜園（とえん）は岡野家に弟子入りすることなく、その作品を頼りに奈良人形作りを極めた彫刻家です。もともとは内藤其淵の弟子で、正倉院宝物や法隆寺の仏像を完璧に写すという力量の持ち主。しかも狂言まで見事にこなしました。現代の奈良人形はほぼすべて、杜園の影響を受けていると言っても過言ではありません。

論文

奈良の人形

岡本彰夫

歴史リレー講座「大和の古都はじめ」第39回 「大和古物の世界」

平成29年12月10日

(はじめに)

奈良の人形について、少しまとめておきたいと思う。
奈良の人形といえは、当然古くは『日本書紀』の「垂仁紀」に見える、皇后日葉酢媛命の薨去に際し殉死の制を止められ、野見宿禰の建言により「埴輪」を造つたことをあげねばならない。

則ち使者を遣して出雲國の土部壹佰人を喚上げ、自ら土部等を領ひて、埴を取り以て、人馬及び種種の物の形を造作りて、天皇に獻りて日さく、自今以後、是の土物を以て生きたる人に更易へて陵墓に樹て、後葉の法則と爲むと。天皇、是に於て大に喜びて、野見宿禰に詔して日はく、汝の便なる議、寔に朕が心に給へりと。則ち其の土物を、始めて日葉酢媛命の墓に立つ。仍りて是の土物を號けて埴輪と謂ふ。(亦名は立物なり。)仍りて令を下して日はく、今より以後、陵墓には必ず是の土物を樹てて、人をな傷りそと。天皇、厚く野見宿禰の功を賞めたまふ。亦、鍛地を賜ふ。即ち土部に任けたまふ。因りて本の姓を改めて土部臣と謂ふ。

こうして土部(土師氏)が蟠踞したのが良質の陶土が採取出来た、大和国添上郡の伏見菅原の地から南へ至る、現在の五条山(赤膚焼の生産地、赤膚山方面一帯)であるといわれている。

次にあげておくのは、やはり平城宮址より出土する木製の人形である。

において二鷹笛役の法師が頭上に頂く、花笠を飾る人形と、田楽衆へ新調した装束を下賜する「装束賜り」の席上、饗応に用いる「盃台」とがその起源と伝える。これら奈良人形に関する研究は、奈良人形師であった竹林薫風氏(本名・薫)の名著『奈良の一刀彫』(私家版)に詳しいが、この研究を参考にして以下の論を進めていく。

そもそも若宮祭は、「保延祭」の名があるごとく平安朝の保延二年(一一三六)に時の関白藤原忠通公によつて創祀された天下の大祭で、当初より興福寺が深く関与し、万端を取り仕切つたため、壮大な祭礼となり、大和一国を挙げて行つた大行事として発展した。その準備は旧六月一日の「流鏑馬定」より始まり、実に半年を費やして諸事を調えるというものである。就中興福寺は諸芸能の中でもとりわけ田楽を大切にし、「本座」と「新座」各一三名ずつの田楽法師が勤仕した。

田楽花笠は直径三尺一寸(曲尺)高さ二寸五分、厚み三分の曲物の輪の中に井桁の枠を組み、上に一尺三寸角、高さ一寸五分の隅切の台を設け、その上に鳥居の作り物に、日月と牡丹花、五色の紙垂を組み合わせたものを中央に据えて、その前後に「高砂五ツ人形」「狸々三ツ人形」を飾る。かつては年々趣興を凝らしたというが、近世には高砂と狸々に固定化し、毎年興福寺の「田楽頭役」である学侶がこの「笛笠」を興福寺別当より拝領し、他の一切の装束は自らが調達を引き受けて本座新座の両座に下賜される。この儀式が「装束賜り」で、祭礼の前日に興福寺の「田楽頭坊」で行われ、新調の田楽装束を下付した後で田楽能と狂言を見ながら饗膳が出る。その際、飾りおかれるのが「盃 臺」で、明治三年(一八七〇)の『春日社若宮祭礼図解』によると、盃台は四種あり、巾一尺五寸に奥行八寸、高さ四寸六分の四ツ脚の台(総胡粉塗り、四ツ足の表裏と台の裏面四ヶ所都合十二ヶ

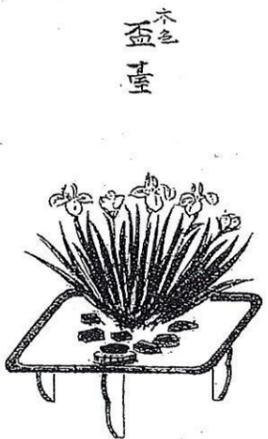
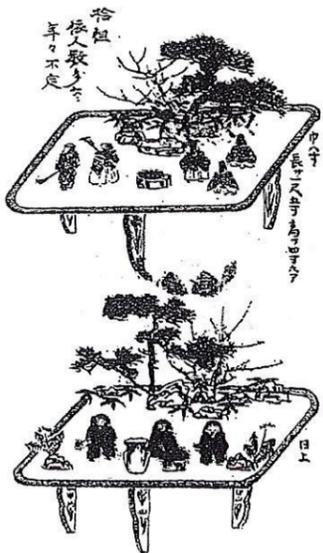
ろう。人間の罪穢や病を負わせて祓いやる形代であったり、中には呪咀に用いたと思われるものもある。
春日大社大宮の例大祭で、三大勅祭の一つとして著名な春日祭において、勅使の「祓之具」として用いられる「黄檗」の人形の用例は、この流れを今に伝えるものである。

さてこのように古代に迄さかのぼる奈良の人形は宗教儀礼に用いられる、人形の本源的な役割をはたすものである。事実、奈良人形は春日大社式年造替で撤下された御殿の古材を以て製作する故に魔除けになるといふ信仰がある。伏見人形の稲荷山の土と同意である。
以下ここでは観賞、愛玩用として用いられた人形を紹介していきたいと思う。

※奈良人形

(奈良人形のおこり)

「奈良の一刀彫」として著名な人形である。古くから「奈良人形」と呼ばれてきたが、元興福寺一乗院門跡であった官幣大社春日神社初代官司(明治維新による制度改正後の初代官司)水谷川忠起男爵の命名により、時代に適したものととして「一刀彫」の名が付せられたという。
この人形の起源は、春日若宮の祭礼「おん祭」で行われる「田楽」



所に彩色絵ありに松竹梅の造花と高砂の五ッ人形を飾ったものと狸々の三ッ人形を飾ったもの。これらはおよそ十組ばかり毎年製作されるが、原則的には当日出席する学侶の数によって過不足がある。その他半彩色の花鳥のつくりもの、他に木色の花のつくりものの四種の盃台が作られた。これらは祭礼後分配され、両門跡（一乗院大乘院）には五ッ人形、院家には三ッ人形というように届けられる。しかし今もつて現物は見つからず、毎年毎年作り続けられた盃台の遺品が見当たらないのは、全く不思議としか言いようがない。

装束賜りが始められたのは大変古く『若宮祭礼記』の久安四年（一四八）九月十七日の条に「御祭馬長共雑色八人、并田楽十人、装束各様之色々令調奉給、即弁公達二人僧綱屋 御着物給」とある。これらをもつて奈良人形が既にこの頃製作されていたとするのは早計に過ぎようが、鎌倉時代の春日社家日記の建永三年（一二〇八）八月六日の条に「若宮手水屋顛倒留居下女死去了」の記事に「又立竹棚下二立人形、此棚竹八本、鋤一口鑿二口、紙三帖ハ彼死人之子息童力壽丸所分也、但棚人形作事巡検等役之」とある事を竹林薫氏が指摘された。誠に意義ある記述であるため、再度確認をしたが残念乍ら鎌倉期の春日社家日記を集めた『春日社記録』の中には、この条文を発見することは出来なかった。またこの若宮手水屋顛倒のことが見える『古今最要抄』や『猪隈閑白記』にも詳細な記述は無い。今後の研究を俟ちたい。

ただこの手水屋には古くから異形の大黒神として知られる「夫婦大黒」が奉祀されている。御主人の大黒さま（男大黒）はいわゆる大黒さんで俵の上に立ち、袋をかついだお姿なのであるが、奥さんの大黒さん（女大黒）は頭に桶をのせ右手に飯杓子と思われる四角いものを

れがあるからで、なるべく手を加えず一刀で彫りあげたが如き風合いを尊重する。これは「檜物師」と呼ばれる神事用の祭具（組物も曲物も）を製作する座に委ねられていた。これに対し彩色は「春日繪所」に属する画工に委ねられていた。その証左は後に『大乘院寺社雑事記』の記述によって述べるが、近世まで式年造替に関する彩色、狛犬の彩色や壁代の絵迄すべて春日絵所が請け負っていたことから容易に想像がつく。

さて前述の田楽の「笛吹笠」（又は笛笠ともいう）に人形が飾られていた事についてその論拠を示しておかねばならない。この辺の事情は『大乘院寺社雑事記』によると、まず長祿元年（一四五七）十一月十三日の条に「一當寺田楽頭乘秀五師方ヨリ笛吹笠事申問用意之、檜物師方下行二十疋遣之、造花代且三十疋下行之」とあって、まずこの笛吹笠が檜物師の手によって製作されたことが伺える。次に文明十三年（一四八二）十一月廿五日に「一笛吹笠一乗院殿二進之、御悦喜云々」とある。一乗院が大層悦ばれたというから相当の趣興があった物と見て間違いない。文明十七年（一四八五）十一月廿五日の条には明らかに人形の存在を確認できる記事がある。「一早日笛笠遣訓英擬講方、畏入、随分ニ致其沙汰、ホタン花六十三付之、ツホミ十五付之、大鼓臺在之、日金也、幔二帖、左冷人二人、龍王兒一人、右納ソリノ兒二人各二寸五分計、岩五六、各サイ色繪所ニ仰付之、宝形并笠ノフチ各金也、水ハ青練貫、緒以下同色、嶋ニ沙悉白ハク、岸ハ金ハク、練貫ノ上ヲ白ハク、金ハクニテ流水成之如常、フチノ上キンハク紙ヲス如常也（以下略）」牡丹の造花六十三と蕾十五の造花を飾り、大鼓の日は金ということならば左方の太鼓で、その作り物に幔（いわゆる楽所幕である）二帖を張り、伶人（楽人）が二人、龍王兒一人とは左方の舞蘭陵王の童舞の人形（童

持ってお立ちになるといふ珍しいお姿で、古くから夫婦和合延命長寿の神として名高い大黒さんであるが、この二体の立像は木彫で、古像は神庫に納められており、現在は正八年に履中齋竹林高行（薫氏の父君）が精進潔斎して彫り上げた二体の神像をおまつり申し上げている。古像は奈良人形とおぼしきもので、春日大社の社家、中臣延致の享保十年（一七二五）の日記によれば、「手水舎鎮座大殿二座御木像、毎年十一月御煤之節、若宮壇上へ御影向、長承四年三月甲子、正預中臣祐房、出雲大社ノ神靈ヲ迎ヒ、名工ト辨ニ立像ニ鉢ヲホラシム、後氏長者ノ御覽ニ入ル、靈驗赫灼、神託ニ依テ手水舎ノ一隅ニ祭ル」と記されている。また元文五年（一七四〇）に無名園村井古道によって誌された『南都年中行事』、二月廿一日の条に「春日若宮御供所拜殿煤拂 早朝、大黒天御厨子を拜殿の南、樹木の本に出して開帳煤掃せしむ。男大黒女大黒とて二軀を安置也。男大黒は尋常の大黒天に替らず。女大黒は飯櫃を頂上に戴き、飯七を御手に持給ふ。尤異躰の像也。御髪を後へ垂たまふならむ。元来、摩訶迦羅大黒天神は、真像僧形長くして後へ垂たまふならむ。元来、摩訶迦羅大黒天神は、真像僧形にして非女躰」と云へり。或説に、辨才天、大黒天同躰なれば、此女大黒天と稱す物は辨才天女の異躰ならむといへり。」と述べている。この二体の像は名工ト辨作との伝承を持つが、卜辨の名は唯一「延致記」にのみ誌されており、存在の有無は確かめ難いものの記憶しておかねばならない伝承だと思ふ。

（奈良人形の特徴と歴史）

奈良人形の特徴はザツクリとした刀使いに対し、丁寧な彩色と細やかな作風にある。丸彫りでないザツクリとした作り方は、神事人形である事を念頭におくべきである。手間をかければかける程穢れるおそ

舞の陵王は面をつけず、右とは右方をさすのか納曾利の童舞（陵王と同様に面をつけず）の人形二つが造られており、下には練絹を敷いて、金箔銀箔を貼り流水や岸辺をあらわし、彩色の岩を五、六個あしらっている。人形の寸法は二寸五分ぐらいとある。以上の記事を総合すると、やはり人形の製作と笠の製作等は檜物師の仕事と認められるし、彩色は繪所の絵師等の手に依っていたことが鮮明となる。如上のような大変豪華で手の込んだ笠が作られていたことであるから当然、一乗院も大悦びをされたのである。それからもう一つ盃台のことを述べておきたい。興福寺の多聞院英俊の日記『多聞院日記』によると天正十年五月十二日の条に「一來十五日安土へ家康請待、既能以下在之云々、奈良中諸方へ盃臺俄二五師衆以下へ被申來色々用意云々、大乘院殿ヨリ金銀ノ彩色ノ基一問、風流船ノ松、臺ノ足銀ニタミテミル目 繪二書、小折ニ合コ・キンカン・ツミマセ、臺ニ繪ヲ書美麗ヲ盡テ沙汰之、山樽三荷上、一荷二酒三斗ツ、入、社中新太夫并春清付テ宗春使ニテ被遣之、從學侶サキシキノアヤツリ張良三尺五寸ノ臺、足銀ニタミ、キリハク金ニ沙汰之、小折三合麩・キソク、ウキ桶エアリクリ、以上、一安土城へ家康を請待する信長は、急に奈良へ盃台の製作を依頼してきた。興福寺の事務執行機関である「五師衆」以下はその準備に追われたように盃台以外にも種々の造り物を出した。一間の長さがある採色の暮とはいかなるものか、想像もつきにくいだが、風流として作られたものは「船ノ祝言」で、これは若宮祭の時、一ノ鳥居内の「影向之松」の下で行われる「松ノ下式」において、大和猿樂四座の内、金春や金剛が出勤の際は「弓矢ノ祝言」が舞われ、観世や宝生が出勤の時は「船ノ祝言」が舞われることと定められており、これは人形で作られていたことに違いない。小折二合は食物を盛ってある。学

侶からは彩色を施した張良の「アヤツリ」が出ている。三尺五寸四方の台にのせてあるから相等な大きさであると共に、なかなか大がかりな操り人形であったと想像がつく。奈良人形は我々が想像しているよりかなり高度なものであったようだ。次にその結果報告として、同年五月十八日「一安土ヨリ御書被下、春清持來、去十五日二盃臺・樽三荷・小折二・合烟茶^{十斤}進上ノ處、臺無比類トテ上一人ヨリ下万人稱美、寺門ノ名譽御門跡ノ御高名也、過分ノ金銀唐物進上モ如此御悦喜御満足ハ無之、一段々々ノ御仕合也ト、尤珍重々々、一寺門ノハ盃臺不入御意、張良ハ祝言ナルカ、クラマ天狗ニ此事ヲウタイ、ヲコレル平家ヲ西海ニ追下ト云事、信長ハ平家ノ故御氣ニ障ル歟ト推量了、」ここでは盃台が問題の中心となっている。安土城への献上物の評価についてである。大乘院門跡より献納の盃台は誠に見事なものとして、信長以下万人が賞美したという。比類無き物というのだから小さい物ながら、贅を尽くした作品であったに違いない。一方学侶より調進したものは、信長の不興をかったという。能「鞍馬天狗」を題材としたゆえに、平家西海落ちにひっかかったらしい。信長は平家を称したからである。

このようにして奈良人形の評価は内外に高く、権門もこれが入手を望んだようである。さてこの奈良人形はその後どのようにして今日迄伝承されてきたかについて次に考えてみたい。

〔春日有職奈良人形師岡野松壽〕

まず近世以来この奈良人形を連綿と伝えてきたのは、岡野松壽家である。この点につき竹林薫氏の説明を「奈良の一刀彫」より引用しておく、「近世奈良人形一刀彫の基をなしたのは岡野松壽一家である。岡野家伝によれば、松壽の遠祖は藤原保孝公といわれ、中古その子孫

子孫もまた一乗院座衆になると申し立てた。大乘院座衆が申すには、必ずしも子孫だから座衆になるというものではなく、弟子を以てつまり器量（技術）を以て座衆となる。松物師の子でなくて松物師になるには師匠の判断に依ると申し立てた。技術を以て判断するのが本来だと以前より決まっている。今度の相論である西御門の松物師は、母が大乘院の兄、部（門跡の牛車を扱う役）で亡き五郎入道の娘であり、父は一乗院座衆であった。その後この子は故五郎入道の猶子という形になったから、ことさらに何も問題はない。というような意味にとれよう。ここで双方の松物師は一乗院座は血脈を重んじているし、大乘院座は技量を重んじているという大きな相違を発見する。そして西御門松物師は一乗院座衆であったこともよく理解できるが、この双方はお互いに通婚していた事情も読みとれる。松物師として唯一生き遺ったのはこの西御門松物師であった。

世に「春日有職」と称せられる西御門松物師は岡野家であるが、現在岡野家はその子孫が奈良に在在されており竹林薫氏が調査された頃には資料が遺っていたようだが、後日改めて調査に赴かれた際には、目にする事ができなかったとのことであったが、最近にいたってその詳細が明らかになった。（後述）『奈良の一刀彫』に収録された岡野家十三代の事歴に新資料を補いつつ代々の重要な事柄を述べておきたい。特に竹林氏による伝承の聞き採りが今となっては得難い資料といえる。岡野家は江戸初期より「松壽」を名乗る。

〔初代松壽〕 俗称平右衛門、技能学才共に長じ、一乗院真敬入道親王の寵遇を受く。当時俗作粗製になりがちであったおん祭の盃台や笛吹笠の人形に工夫改良を加え、高砂と狸々の二種の題材に統一した人であるという。初代作と伝えられる人形は、高砂の尉と姥や狸々、松材

衛門多左衛門が南都小西町に住して松物類製作の業をはじめ、のち代々松物師右衛門太郎と称して西御門町に移り世襲した。『大乘院寺社雜事記』に、西御門松物師右衛門太郎の名が出ていて、既に室町時代には居住して一乗院方松物座に属していたことが知れる。しかるに岡野家古記録は天文の変にほとんど家屋と共に焼失したといわれ、その点については明らかでない。

江戸時代にはその後裔が松物屋平右衛門と通称し、世々これを継承し、松壽と号した。松壽の号は明治時代まで十三代続き、代々西御門町に居住して「春日有職松物師」を司っていた。岡野家の墓所は、もと鳴川町徳融寺にあったが、江戸中期より眉目山（大豆山）町崇徳寺へ変わっている。」と誌されている。中世以来の松物師やその製作にかかる笛笠や盃台については『大乘院寺社雜事記』に散見するが、「西御門松物師」について竹林氏も指摘されている明應二年四月九日の条を示すと、「一松物師ハ兩門跡之座兩流也、近日當門跡之座衆八九人在之云々、人數不定、多少依時者也、如一切座也、一乗院座之子當門跡座之猶子ニ成者有之、然而一乗院座衆申ハ、彼門跡之座衆子之上者、以子孫之彼門跡座衆之由申立之了、大乘院座衆申ハ、不依子孫而弟子次第也、雖非松物師者之子成松物師者、以師匠為本之由申、兩方座衆等如掟法申定之、以師弟次第可為本旨一決事舊了、今度及相論西御門松物師ハ、母ハ當門跡兄部故五郎入道之女子也、父ハ一乗院座也、總又五郎入道之猶子ニ成了、殊更有子細者歟、」とみえる。重要な記事であるから吟味しておく、松物師というものは一乗院大乘院兩門跡に属する二つの座がある。近頃大乘院方は八九人であるが人数に定めない。一乗院座の子が大乘院座の座衆の猶子となることはある。しかるに一乗院座衆が申すには、一乗院座衆の子である限りは、

の龜香合があったというが刀法はいたって大まかであるものの独特の気品と雅趣があった。宝永五年（一七〇九）没。

岡野家蔵の明治十六年七月に誌された十三代保徳による『先祖累代靈名記』（以下靈名記という）によると「銘人宗貞入道 此人木偶名ヲ博ス」とある。

〔二代松壽〕 俗称平右衛門。享保の火災後の興福寺復興に協力。募財等の為の土産用の人形をしばしば手にかけてという。享保十九年（一七三四）没。

〔三代松壽〕 事歴不詳。元文三年（一七三八）没。『靈名記』に「銘人ナリ」とある。

〔四代松壽〕 事蹟没年共に不詳。

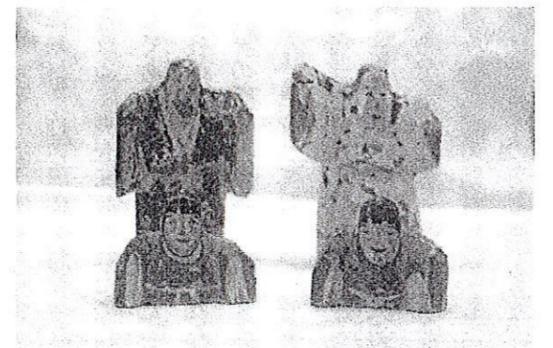
〔五代松壽〕 茶商山田家より養子に入る。生来の無器用で彫刻技術も拙劣であったため、家名の墮るのを憂いた妻（四代松壽の娘）は、夫に桶や杓の松物類を専門に作らせ、自らが刀を握って人形製作に当たったという。この人が有名な壽貞尼で、殊に立雛人形を得意とし奈良人形立雛の代表型として、後年まで手本とされた。素朴荒けずりながら端麗な姿で優雅な彩色が好評であったという。五代松壽は宝暦十年（一七六〇）没。壽貞尼は安永五年（一七七六）八十一歳にて没した。『靈名記』の五代松壽の頃に「奈良人形ノ名称世ニ盛ナル事」とあり壽貞尼の頃には「婦人ニシテ木偶製造ヲス」とある。

〔六代松壽〕 本名満族。明和六年（一七六九）五十八歳にて没。

〔七代松壽〕 六代の弟で安永八年（一七七九）没。

〔八代松壽〕 また山田家より入って岡野氏を継ぐ。寛政九年（一八〇九）没。独占世襲のため代々能拙の差が甚だしく、初代以来ほとんど書銘、彫銘が無く、八代迄は全く判定が不可能である。松や杉を用い

田楽の人形は尉姥、狸々等高さ四寸前後。裏面は鋸目のままで中央に穴がある。台に取り付けるため串を刺した跡と認められる。顔面及び総体を大まかに彫り、指先等は彫らず巧妙に彩色を以て表現しているのが特徴であるが(写真①)、竹林薫氏曰く至って簡朴ながら文人画を見る様な雅趣があり一刀彫という感があると評されている。



写真① 現在最古と思われる奈良人形

〔九代松壽〕通称平三郎。実名は保伯。八代の弟で神童とうたわれ、学才技能にすぐれ、奈良人形を深く研究し彫法も改良、多くの新作を発表し好評を博した。田楽人形を始め、能を題材にした能人形、雛、武者人形、鹿、鶴等の鳥獣類の彫刻もこなし、一尺以上の大作や、置物、根付、香合等の小物も製作した。人形や臥鹿の足の裏迄丹念に彫り上げて彩色を施すようになったのも九代目頃からのようである。また人形に銘や花押を入れ、箱書も行うようになったのも彼の創始であろうと考えられている。長澤蘆雪とも交流があり絵にも巧みで魚月や二皓亭(以後代々)を名乗った。和歌を嗜み能狂言を好み、茶道の心得もあるという文化人であり名実共に奈良人形を芸術品とした功績は大きい。故実の研究も深く「春日若宮祭祀記」や「若宮祭礼木具 細工相伝要記」等の記録が岡野家に伝来していたとのことで、その奥書には「寛政十二庚卯九月、檜物師右衛門太郎口傳、岡野松壽保伯写之六十才」と認めてあったと竹林氏

歳で早くも十一代を継承。元来の虚弱体質で変骨者であり生涯独身であった。主として土産用の小品を多く作り、大作や傑作は余り無い。天保十四年(一八四三)四十二歳で没す。『靈名記』に「独身ニシテ家職ノ盛大ヲ極ム」とある。

従来文政改刻『平安人物誌』所載の松壽は保久とされてきたが文政版に近国の部の記載なく天保五年出版の天保改刻版に松壽の名が見える。「人形工 岡野恒 字公耻号璞巷同(南都) 西御門丁岡野松壽」とあるのがそれで年代的にも恒という名からもこれは恒徳のことであろう。但し嘉永版にも同様に記述があり、これは惟孝をさすものか恒徳をそのままにしてあるのかは判別が付き難い。

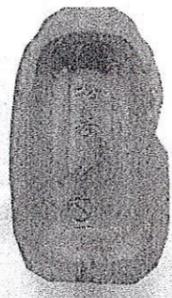
〔十二代松壽〕同じく萬平。実名は惟孝。十一代恒徳の弟。彫刻はもとより絵画にも優れ、和歌、俳諧、謡曲、狂言等も造詣深く、古美術の鑑識にも長ず。研究熱心で各種の新作、模刻をなした。作風は保伯、保久の流れを受け松壽の伝統を重んじる上で、同時代の杜園とは多少異なるところがあるという。優れた作品に狸々、内裏雛、武者等の人形類、鹿、猿、亀等の動物彫刻があり各種銘木を利用した逸品、極彩色のものなど各種多様なものがある。明治十七年(一八八四)六十一歳で没。

〔十三代松壽〕通称友治郎。実名保徳。若くして父を失い、独力で製作に励む。小物を得意とし、雛人形や黒柿彫や乙女面、十牛等に面白い作品があるという。後道具商を営むようになる。山村御殿円照寺にはかなり大作の雛人形(極彩色 男女座雛に両大臣の揃ったものという)が納められている。明治三十四年(一九〇一)五十五歳にて没す。嗣子松彦は時に幼少でその業を継げず、不遇のうちに成長し他職に就いて江戸初期以来十三代の松壽の名跡もここに断絶に至った。各代共

は書き遺しておられるが、奈良市文化財課の岩坂七雄氏の調査により岡野家に「寛政十二庚申年九月、岡野松壽保伯写之行年六拾歳」と奥書のある「春日御祭禮木具記」や保伯名の表紙がついた(裏表紙には「安永九庚子年霜月改 岡野平三郎」とある)『細工相伝要記』等の資料が存在していることが確認された。『靈名記』も同時に確認出来た新資料であることも申し添えておきたい。さて保伯は文化七年(一八一〇)七十一歳にて没す。松壽代々中傑出した彫刻家である。『靈名記』に「一家起シ工業改良ス」とある。尚東京美術学校校長の正木道彦の日記『十三松堂日記』には保伯の記事を引用して保伯とルビを振っていることを申し添えておく。

〔十代松壽〕通称萬平、実名保久、九代保伯の息。父に次いで奈良彫師の妙手といわれた。その作銘には「耻」(恥)の字を刻したという。古材、銘木を彫刻に応用する才能と技巧に長じていた。奈良人形の用材に新機軸を開いた人という。保伯同様写実的で絵画風であり、刀法細かいものの刀痕が鮮やかで力強く、極彩色重厚で雅味に富んだ作品が多い。木地彫として黒柿、紫檀、桜、松、梅、竹根等を巧みに活かした人物鳥獣等の腰差、根付がある。この人の作品をヒントにして、宇治の神林牛賀(清泉)が読み出したのが、「茶の木人形」だといわれている。名工の誉れ高い森川杜園は彫刻の師無く、独学によるものとされるが、九代十代の松壽の作品をつぶさに研究したと伝えられる。事実杜園の作品には意匠も造形も寸分松壽と違わぬ作品が色々と遺されており、ある意味では杜園作品は刀の切れ味さえ違え、松壽の模倣を基点としたともいえよう。十代松壽は文政八年(一八二五)五十八歳で没した。『靈名記』に「奈良人形最上ノ銘人」とある。

〔十一代松壽〕同じく萬平。実名恒徳。先代保久の長子。二十三、四に個性もあり、技能も優劣さまざま乍ら、古雅、渾厚の気品は岡野一流の家芸であると竹林氏は評しておられる。さてここで松壽代々の作品についてであるが、銘を認め得るのは九代保伯以降であること。管見の及ぶ限りほとんどが彫名で、松壽の名と花押を入れてある。しかしこの銘を九代以降の誰に充てるかは至難で、竹林氏亡きあとこれは全くの不明と言つてよい。九代以降の五名の誰と判明するか、まず以



写真③ 保伯の彫銘と花押



写真② 保伯と確認される印と署名

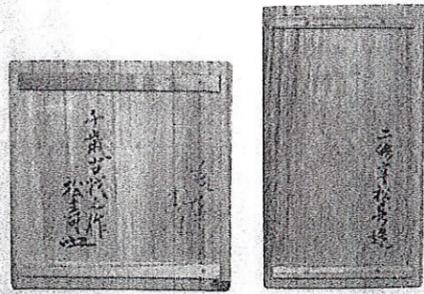


写真④ 保伯作「伏鹿香盒」

て製作年月を箱書きした物はほとんど見当たらない。そこで彫名と花押の断定が必要となる。まず箱書に捺された印が明らかに「保伯」と読める作品を確認できたので、その箱書(写真②)と作品に彫られた彫銘と花押(写真③)そしてその作品(写真④)を示す。次に十代保



写真⑤ 保久と考えられる「耻」花押



写真⑥ 保伯・保久以外の松壽箱書

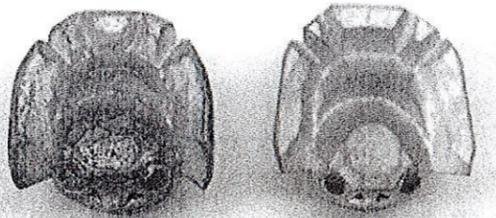
久の「耻」と認められる彫名(写真⑤)を示す。私なりに九代十代の作品はおさえたつもりだが、あと三名は断定に至っていない。今後の資料の発見を待つばかりである。一応九代十代以外の花押と彫名を写真で示しておくにとどめたい。(写真⑥)

(名匠森川杜園)

平櫛田中翁が明治の木彫の巨匠について尋ねられたとき「一に竹内久一、二が無くて三が森川杜園」と答えられたという。祭具や土産物とされていた奈良人形を賞翫の域に達せしめたのは保伯保久の功であり更にこれを芸術品の域に達せしめたのは森川杜園の功績に他ならな

守り、暇さえあれば絵を描くことを最上の楽しみとし、紅殻や藍玉を求めては着彩し子供の求むるままに多く描き与えていたという。また堅木屋で切屑を入手し、文庫の底に貯えておいて鰻割きの包刀でよく彫刻をした。天保三年十三歳の時始めて師匠について絵を習い(鹿の絵の名手内藤其測が師匠)一、二年にして技倆を發揮。十六歳の時、当時奈良奉行であった梶野良材より画の御用を命じられ、十七歳で名と号を与えられている。其の時の書面として記されているのは、「校書工友吉名字并號扶疏 訓登毛志計 杜園 訓加都羅曾能神代紀日井上有一 杜樹枝葉扶疏採字於斯文是因其宅地之稱呼日井上者蓋所以祝其功業之繁盛也 天保七年五月既望 聽濤館主」梶野良材は国学の素養もあつたようで、その名と号は日本書紀より採っている「神代紀に曰く井の上の一の杜樹あり枝葉扶疎し、字は斯文に採る。是其の宅地の稱呼に因つて曰く井の上は蓋し其の功業の繁盛を祝ふの所以なり。」南都井上町に往したことから、海幸彦山幸彦の神話の一文を名として与えたのである。扶疎はトモシゲと訓み、杜園はトエンでなく本来カツラソノという。森川家は元筒井順慶の家臣といい、添上郡横田村(現大和郡山市横田町)に住していた。杜園の祖父喜七迄代々農業を営んできたが父喜右衛門が家業を転じ、奈良福井町に出て米穀商を営んだ。福井は高畑にある地名で春日の杜家町の一角であり、柳生街道の入り口に当たる。随分柳生往還の人々で賑わったところであるが、後井上町に移り、奈良町の富豪瀬川家に入入りして紀州の銀方御用や公事宿を業とした。その印は角の中に八の字を書いたので世に角八と呼ばれていたという。十八歳の時始めて彫刻で身を立てることにした。小伝には「これより先奈良の彫刻家に松壽保伯といへる名手ありしが翁が六歳の時に没し翁より十六歳長せる松壽恒徳其業を継げり。

い。松壽の項でも述べたが、杜園に特定の師は無く、保伯、保久の作品を師として研究独自の境地を切り拓いたというものの、松壽と瓜二つの作品が遺っている。ここに示す一例「ふくら雀」の根付(写真⑦)は正にそのもので、刀の切れ味こそ杜園は優れているが、意匠造型は模写そのものといえる。研究熱心であった杜園は更に一歩二歩と奥深い境地と技能を求めていくが、一方模倣、模写にもこだわりを持つていなかったといえよう。これが後年正倉院御物等の模写に類稀なる力量を發揮する杜園の原風景ともいえるものである。さて、ここで杜園の生い立ちを紹介しておきたい。これをいち早く世に紹介したのは、「大和の水木か水木の和和か」とまで称せられた十五堂水木要太郎氏(奈良女子高等師範学校教授)で、明治三十七年(一九〇四)に開催された杜園の作品展に合わせて編集された『森川杜園翁小傳』(以下小伝という)である。昭和六年(一九三二)に再び開かれた杜園遺品展に版を小さくして再版されている。杜園没後、十年を経て編集されたものであるから、確かな情報で綴られている基本資料である。この資料をもとにしてその事歴を述べておこう。森川杜園は文政三年(一八二〇)六月廿六日奈良の井上町で生まれ、幼名を友吉と呼び通称は彌兵衛といった。学業に熱心で能く師の教訓を



写真⑦ 左が保伯作右が杜園作

翁これらの作品を見師伝あるに非ずして刀法を自得する所あり別に一機軸を出して専奈良人形の彫刻をなせり」としている。杜園は三業と自負して絵、彫、狂言いずれも一家を成していた。三十一歳の時家業を弟に譲って中新屋町に居を構え三業を以て身を立たしたのであるが、杜園の出世作となるのは、奈良奉行所の風流与力陶々斎橋本政方の依頼によって彼六十歳の還暦を自祝して記念の品とした、金春大夫家伝の赤鶴の面をつけて舞った「後ノ高砂」(高砂の後ジテのこと)の舞姿を彫刻した尺余の大作で、三十八体彫刻されたことが確認されている。これが嘉永二年のことで、後安政三年三十七歳の時「春日若宮の大宿所前繪師職となり並びに神事式、田楽法師の笛吹の笠、坊用の嶋臺、造花人形等々調進することとなりまた此頃より春日有職奈良人形師を命ぜられぬ。」と小伝にあるが、これには疑義がある。杜園は確かに「春日有職」を名乗り、多少共杜園に縁がちな者まで「春日有職一家」を名乗って今日に至っているが、この点につき私見を述べておきたい。この件についてよくその事情を看破したものがある。それは昭和十八年七月十日より二十五日迄、奈良帝室博物館で開催された「森川杜園遺作展覧会」の図録『杜園』で終戦時の昭和二十一年九月に同博物館が編集し世に送ったものである。この中に紹介された「杜園略傳」に興味ある記述が出てくる。「繪師としては安政五年頃より、興福寺一乘院、大乘院の用命を受けていた故を以て、春日繪師職を自稱し、檜物師の系統を承けたという為にか、自ら春日有職を名乗ったが、明治五年頃より春日有職一家などと稱した。」この紹介は正鵠を得ていて簡潔な中にも微妙な内容を明らかにしている。杜園の繪師職はあくまで自称であったこと。略伝では一乘院大乘院両門跡の用命を受けていた(文久二年に執行された「春日御七夜御神楽圖」は

杜園が実写」という訳が付されているが、そもそもこれは春日若宮のおん祭の際、大和士が参籠する「大宿所」の神前に掲げる「大宿所前絵馬」の揮毫を杜園が依頼されたことに依る。この絵馬は春日社や興福寺から正式に発注される物ではなく、大宿所の賄方を託された「奈良町代」からの依頼であったが、これによって画料米を受けたことにより自らを称したもので、決して正式な補任がなされたわけではなく、ついにはこの事をして本人が拡大解釈をしたものであり、この拡大解釈が「春日有職」へと過熱していったのだと私は考える。折しも明治維新に依って旧体勢は崩壊し、誰も咎め立てする者も無く、そのまま居座ってしまったのであろう。この証左として彼が大宿所前絵馬に裏書したものが遺っている。「年々此通り之絵馬新調、春日若宮御祭ニ餅飯殿町大宿所へ相納、同所ヨリ下行米五斗并きし菅羽、戴来り候事数年之むかしより不変之処御一新、被廢候也依之、森川氏ハ春日有職タルヘシ」 中新屋町 森川 杜園

と誌されていることから、いかに杜園が春日有職を渴望し、そしてあこがれたかがよくわかる。それ程に奈良人形師にとって春日有職は看板であり權威なのであった。さてもう一つ杜園について特筆すべきは古器古物の模造に妙技を發揮したことである。すでに元興寺九輪の香合を幕末に製作し古物模写には着手をしているが、本格的には明治八年五十六歳の時、奈良博覧会社の命により吉野山如意輪堂の扉つまり楠正行の矢劔にて「かえらじ」と、あの有名な歌を刻んだ扉を模写したところ、これが真物に見まがう出来であったとして以後、翌九年には博物館より正倉院御物の写図を命じられ、ついで東大寺南大門の石像狛犬の模造をも命じられている。木彫で金石すべての物を模造するという技は、神技とさえ謳われたのである。小伝には「彼の

一、彫刻にあたっては概して亀甲型にほり進めていったやうであります。

一、動物の場合は人物に引換へ物事に感じ易いためか眼は揃はず、耳角首脚等は必ず或一定の方向に向って不揃の形で刻んであります。

一、鹿に就いては特に屋号も鹿廼家と称したりなどした程で、余程興味を持つてゐたやうに思われます。従つて多種多様の姿態をうつしてゐますが、大体顔の長さ角の一ノ又と耳の開きは同寸であり、三の又の開きはその一倍半です。背筋の斑点は必ず二十一から二十三位に定まり、その他の斑点は一定しておりません。胴の割当は前脚、腹部、後脚と三部分に割出し、尻より見た時は股の肉が特に迫った感じですが、着色は四季の時候にあはせて彩色を施してあります。

一、落款は(花押)・杜園・杜園(花押)・杜園造・杜園造之・杜園製・杜園拜刀・杜園戯刀・杜園謹刻等とあつて、十中九迄は書入れしでありますが、但し尉姥の置物に限り十中九迄は書入れなし。その代わり箱の書付けは当時の土産物に至まで杜園謹刻とあります。箱書は根付はその蓋裏に、他は蓋の表です。特別のものとしては箱の内底に書いたのがあります。

一、信仰の対象となるものには落款は決して施してありません。

一、花押は恥という字のくずしではないでせうか。辞世の歌によつてもそう思はれるのであります。(注・罷出て あらぬ手業を世に残し さも恥しと 身は隠れつる)

以上外形的な特徴を種々挙げてみましたが、作品として二期に分けるのが便利かと思はれます。即ち明治初期前後、杜園の五十才頃までを前期としてみますと、所謂一刀彫の妙味はこの時代で完成され、その極微に達したのであります。後期は杜園が宮内省御用を仰せつかつて

金峰山寺経箱の成功したる時翁三人の妹を呼び其何れが模刻なるかを言ひ中てたらむものには褒美を与ふべしとて両者の蓋を取り替えなどしたれど青錆の塩梅金の燦爛たる様など両者毫も異点を見出す能はず。又法隆寺塑像の成功せし時には奈良の好事家識者を集めて之を示したるに誰も能く真模を甄別し得るものなかりしといふ。正倉院の弾弓を模したる時其緻密なる模様など寸分違はぬやう出来たれども唯孔の中に貼れる皮の古びのみは如何にしても真似出来ずと翁自言ひしことありとか。さても何人も之には気付く能はざる点なりしなり。曾て一仏像を模刻するに頭上肩辺等細粒の点点附着するを見て思を潜め心を碎きて遂に蜘蛛の糞なることを発見し益其真を得るを得たりといふ。」と誌されている。事実何年か前に杜園没後百年展が奈良県立美術館で開催され、私の友人の学芸員が担当し東京国立博物館へ、所蔵の杜園模作金峰山寺経箱を借用に赴いたところ、どう見ても金銅製の経箱が木製であったことと同感嘆の声を上げたというエピソードがある。

さてここで杜園作品の特徴を示しておきたいと思うが、これには既に先賢の研究もあるものの、従来あまり発表されることのなかったものに昭和十八年発刊の『大和志』第十卷第八号に収載された、谷川喜六氏の「森川杜園翁について」がある。谷川喜六氏は奈良では有名な杜園収集家であり、研究者であった。収蔵品は既に散逸し、多くは平櫛田中翁の有に帰したであろうと言われている。谷川氏の所感に拠ると、「一、能狂言等の人物は総て大小を問はず、例へば高さ十とすれば横巾六、厚み四の割合で造刻し、顔は能狂言の場合は五分の一、普通人物は六分の一の比例で釣合ひをとり、両目、両鼻孔、耳は必ず普通人物の場合平行し、如何に小さいものにも小鼻の存在を示してあります。

正倉院の御物模品を作った頃からで、勿論技さえ、鈞整の美は益々深く刀に一種のさびがついてまいりましたが、そのかはり以前のやうな豪放簡素の趣は少なくなりました。尤もこれは丸彫りを真似た結果、刀角に丸みがついたと云うやうな事情にもよるでせうが、その何れが良いかは観賞者によつて各々異なる訳でありまして比較的初期の作品を推賞する人もあり、断定は出来ないことでもあります。」と述べられている。あらゆる作品を照合した結果に得られる答えであり、今となつてはもうこんな研究は望とも叶えられようもないもので、重要な杜園作品の基準とすべき事項である。私も以前杜園作の鹿角の差口は角に取つてあつて丸は贗作だと聞いたので、あわてて春日大社所蔵のかの有名な「生玉伏白鹿像」の角を調べたところ、差口は丸であったので、この種のまことしやかな話には、充分注意すべきを思い知つたが、谷川氏の指摘は誠に貴重である。

本来ならば杜園以後の名人巧者の説明を始め、奈良の各種の人形へと移っていくべきだが、決められた紙数も尽きたので筆をおく。いつしか機会があれば続編におつきあい願うとして、とりあえず奈良人形の一端をまとめてみた次第である。

(春日大社権宮司)

致御祓所迄曳大宮南門南橋注連ヲメテ
若宮日並御供始テ奉備番社司権預祐綱也
九月九日節供等以十月十六日備進了
御祓事

以十月廿六日甲子戌時爲社家沙汰以若宮神殿
守六年春迄遂候事

祭物三間二面屋一宇牛一頭白布二段中仏
三帳料米料白米一斗也

壞弄彼転倒手水屋其跡ヲ爲造宮使
行事沙汰令掃除之後巡檢等弃其跡土以他
土埋之

又立竹棚下ニ立人形此竹棚八本鋤一口鋤一口
紙三帖ハ彼死人ノ子息童利寿丸所出也
人形作事巡檢等仕也

建永二年(二二〇七)倒壊した若宮手水屋で圧死した下女の死体を曳
き出し、まわりに注連を曳いて人の出入りを止め、御供の備進を止め
三十ヶ日の自然浄化の時を待って清祓を遂行。後に手水舎の建替等が
なされた記事である。土も掘り捨てた跡に竹棚を立て、その下に人形
を立てており、その「人形作」は都より遣わされた「巡檢」が行ったとよ
める。以上等身大や、各種装束を着した人形が祓に用いられていたとい
う誠に貴重な例を示すことが出来た。しかしこれが奈良人形の最古
の記録と見るか否かは決し難く、この人形は完全な形代としての性格
のものであり且つまた奈良で作ったか否かは不明とすべきであろう。
◎織田信長に献上されたという輝かしい「盃台」は、『多聞院日記』に
よるとその後、豊臣秀吉にも献上されたこと。つまり、同日記の文録

まず瀬谷桃源と中條良園があげられよう。後に東京美術学校教授となつ
た水谷鉄也もその一人で、佳園と名乗っていた。

○瀬谷桃源とその代々

瀬谷桃源は奈良人形の名工として、紹介せねばならない家系である
ものの、従来詳細に紹介したものはほとんどない。新出史料も併せ出
来るだけ詳しく誌しておきたいと思う。

まず竹林薫風氏が『奈良の一刀彫』で示しおかれた桃源の家系と事
歴を、長文ながら掲げておこう。

「瀬谷桃源

瀬谷桃源の先祖は代々大和郡山柳沢藩々士であった。桃源は文政六
年郡山で生れ、瀬谷甚平と稱して藩の内膳掛を勤めていた。性質温厚
で技芸の造詣も深く殊に彫刻には趣味をもっていた。

維新の廃藩後、松壽、杜園の作品を手本として奈良人形の製作をは
じめた。中年ながら才智勝れ、素質よく刻苦勉励して、独習を以てや
がて本職として一家をなすにいたった。

明治六年甚平五十二才の時、奈良東大寺境内大仏殿前鏡池の南辺に
家を新築して、表で奈良の名産品の店を開いて陳列販売、その傍ら桃
源と号して置物、根付等の一刀彫を彫刻した。

杜園とは直接師弟関係はないが、彼は常に杜園を尊敬し、杜園の作
品根付類を多く愛蔵した。作風は杜園の作品と一脈通じるところがあ
る。しかも彼特有の武士気質ともいべきものがその刀法と彩色の隅
々にまで溢れている。

この桃源の作品には一刀彫の置物もあるが、根付類や二、三寸の小
品が最も多く、一見杜園の作品を髣髴させるものもある。書や絵もま

三年八月十八日の条に、「來廿三日集樂關白殿へ、伏見ヨリ大閣御成
トテ都鄙震動、盃ノ臺廿六ナラ中ノ細工ニ誂、金子二枚ノ入目ト云々、
ケツコウ言慮不及由也、方々古酒悉買上、一升銀四フツツト云、四
升カエノ心也」とあり、聚樂第へ秀吉が来ることにより、奈良中の細
工師に命じて、結構を尽くした盃台を二十六台作らせており、その費
用が金子二枚だったこと。

◎それから毎年おん祭に用いる田楽の笛笠が、別当より新調品を頭坊
へ下されることを書いたが、これについて同日記、天正十一年十一月
廿四日の条に「大乘院殿ヨリ摩尼へ笛ノ笠二ノ内、一ハ吉備ノ大臣歸
朝ノ處、一ハ八仙ノ所也、十五石ノ入目ト云々、見事サ人形十二ツ
之、惣フクリン也」とあって、「三ツ人形」や「五ツ人形」どころでは
なく、人形は十一、二ずつで、片や吉備大臣帰朝、片や舞樂八仙の姿
を写し二つで費用が十五石、これが大乘院より頭坊の摩尼珠院へと下
賜されている。

以上三点を記しておきたい。

さて折しも明治以降の特集と銘うつ人形玩具研究に、うまく当方も
書き残した箇所が合致することから、是非にとのお勧めもあり、瀬谷
桃源とその代々、明治以降の奈良人形、そして他の奈良の人形につい
ても順次筆を進めさせてもらうこととした。しかし瀬谷氏宅にて珍し
い史料を拝見する機会を得たのでこれを収録するため本号は瀬谷家代
々の紹介に留めて紙数も尽きることとなる。

(杜園以降の奈良人形師)

杜園の影響というのは大したもので、その後の奈良人形師は大なり
小なりその作風を模した者が多い。もちろん独自の作風を重視した者
も多いが、とりわけ杜園の風を慕い、その指導をうけた者といえは、

た巧みであり、彫刻の彩色にいたっては至極丁寧で鮮やかなものが多
く、その人柄もうかがえる。明治十八年発刊の「奈良名士録」には、森
川杜園、岡野松壽と共に、奈良人形師大仏前瀬谷桃源と記載されている。
明治二十三年四月八日病の爲、六十八才で卒去した。川上町空海寺
へ葬られている。これを初代桃源と稱した。

二代桃源は先代甚平の嫡男として郡山で生れた。幼名源之助、元服
して梶藏と名乗った。若少の頃から父に就て彫刻の道に入り、芸熱心
で上達も速く、奈良へ移ってからも益々技倆を伸ばした。父は杜園の
許へも出入し、幼少の長男を杜園に頼んで絵の指導を受けさせたこと
もある。父の死後二代桃源を継いで大仏前で商いと製作をしていたが、
明治三十年頃東大寺大仏殿前の人家整理に際して移転、三町程東の若
草山麓の手向山社南門前へ家屋を新築した。梶藏は表を名産店とし、
奈良人形の彫刻にも力を注いで製作に励み、同三十年奈良美術会発足
には率先して参加し、年長者として指導的に活躍した。

明治三十三年皇太子殿下御結婚に際し、奈良人形高砂尉姥を献上し
て嘉状を賜わり、同年佛蘭西巴里で開かれた万国博覧会には、木偶高
砂置物等数点を出品して海外にまで名を広めた。また同年第一回奈良
市物産共進会にも木彫置物を出品して褒状を受けた。

同三十六年の内国勸業博覧会には、木彫置物を出品して褒状を受け
るなど各種展覧会、博覧会に入選、受賞することもしばしばあった。

そのうえ彼の一刀彫作品は明治天皇の御買上げの光栄にも浴し、晩
年には宮内省より命ぜられて舞樂等の彫刻をなすこと数度、無上の名
誉を蒙った。彼の作風は、初代同様杜園の作品に感化されるところ多
く、彫刻に、彩色に、至極入念緻密であって、生氣があり奈良人形の
名手の一人と評せられた。性格も温厚で、言動も真面目であって、趣

味も深く能狂言を好んだといわれる。

明治四十一年三月二十日梶藏、二代桃源は六十五才を以て永眠した。二代桃源の長男の孝文は、幼少から絵画を好み、杜園に師事して彩色の免許まで得、彫刻の素質もよく将来を大いに期待囑望せられていたが、若年にして死亡した。

次男の梅源は幼名を治と稱し、父桃源に就て一刀彫を学び、家を継いでからは名産品商を営む傍ら、盛んに奈良人形の製作に励み、商工省工芸展はじめ各種の博覧会、展覧会等へ出品、入選または受賞を重ねた。昭和十四、五年頃は長男の応召もあったが張り切つて製作していた。しかし何を感じたのか、終戦前後より他人と会う事を嫌い、一



写真1 初代桃源作

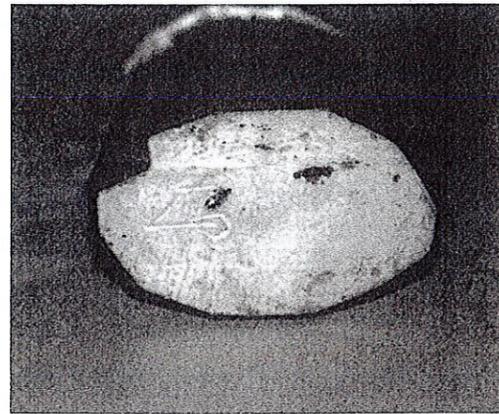


写真2 初代桃源花押



写真3 瀬谷桃源作 立雛箱書

よく瀬谷家の家系を調べてみると竹林氏の誤認がありここに改めてその点を訂正しておきたい。つまり、三代桃源は二代桃源の長男で明治十四年四月七日生れ治といひ、特に達磨と根付類の小物を得意とした。没年は竹林氏の調査通りである。弟に福蔵がおり、この人はまことに

室に閉じ籠もることが多くなり、次第に老齢も加わつて静かな余生を送った。昭和三十三年六月十日老衰の爲、七十七才で死去した。

四代目は先代の長男で、明治三十六年生れ、本名を源治という。父に就て一刀彫を勉強し、店頭で名産商を営みながら能人形の製作に励む。早くから木彫家協会に加盟して活動を続け、戦後は梅園と号して彫刻製作に没頭した。性格いたって温順、作品にも至極丁寧な彫刻彩色した。殊に雛人形の小物は彼独特の技能で、東京人には殊の外好評であった。所蔵の杜園の作品を通じて平櫛田中翁とも親しくし、昭和三十八年には東京の平櫛家を訪れている。業界切つての人格者であったが昭和四十四年四月九日六十六才で死亡した。

梅園の長男吉弘、昭和十四年十月十四日生れ、一刀彫の道に進み、五代目桃源を襲名した。父に似て真面目で彫刻に励み、目下活躍中である。一

筆者は本稿執筆に当り、疑問点を解明するため、五代桃源瀬谷吉弘氏宅に伺い、以下のことが判明した。

まず(写真①)の立雛は丈七寸もある大きな物だが(写真②)の花押と(写真③)の箱書を見て、現代桃源氏はこれを初代桃源作品と断定された。その特徴として細い描き目と襟の彩色を指摘された。

次に二代桃源の特徴を伺うと、二代三代はほとんど根付等の小物を製作し、歴然とした特徴を認める事は困難とされ乍らも、二代桃源の立雛は、描き目は初代同様に細いが、もつと切れ長で、襟の彩色は茶一色で表現されているという。

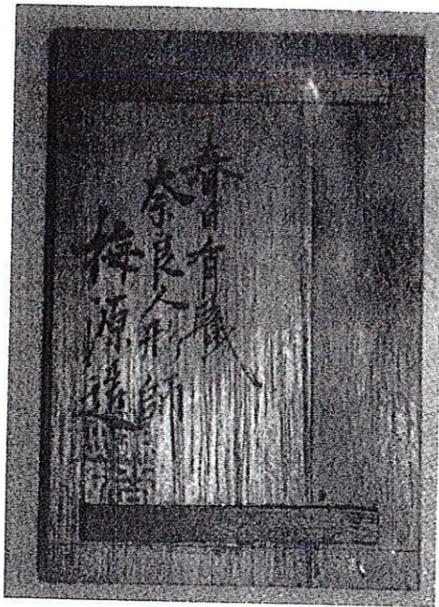
次に(写真④)と(写真⑤)は一瞥して判るように同筆である。即ち三代桃源を一旦名乗った桃源は後に梅源と改名したこと。この点がよく



写真4 三代瀬谷桃源作 三番叟箱書

絵が達者で同家には多数の粉本が今も遺されているが、惜しくも戦没する。三代桃源は先にも述べた如く一旦桃源を襲名するが、すぐ梅源と改名している。この梅源に三男二女あり、長男が源治で、この人が四代桃源(一旦四代桃源を名乗っている)となり、後に梅園と名乗る人(昭和四十四年四月十六日六十七才で没)。この下の弟がつまり次男の孝文で、少々彫刻はやつたが現奈良国立博物館に勤務した。そして三男が義雄。この人は梅園を名乗って別家酒井家を継承。奈良人形を製作した。そして四代の梅園の長男が現五代桃源の吉弘氏(昭和十四年十月十四日生)。六代はその長男昭和四十三年九月二十九日生れの清志氏となる。

同家を訪問した際示された史料の中に未だ発表されていないものがあることを発見。昭和十四年に幕末維新の歴史に詳しい奈良の郷土史家藤田祥光氏の手になる「奈良彫と瀬谷一家」である。おそらく四代



瀬谷桃源作 道成寺箱書

桃源の希望により執筆されたと思われる内容だがここに同家の好意により収録させてもらうこととした。

『奈良彫と瀬谷一家』

初代 瀬谷桃源氏

世々郡山藩士タリ 其祖ハ江戸詰ノ上席タリ 後代郡山ニ移居ス 通稱甚平 号桃源文政六年郡山ニ生レ 青年時代ヨリ彫刻ニ趣味ヲ有シ 余技トシ一刀彫奈良巨匠九代岡野松壽保伯 十代松壽萬平ノ作品ヲ模刻シ 後森川杜園ノ作品ヲ範トシ 杜園ニ評ヲ乞 天稟ノ名手ハ刀法ヲ自得シ 名作ヲ出シ 杜園モ歎賞セリ 現在瀬谷家ニ所蔵セラル數種ノ作品ヲ親シク視ルニ 人形ノ姿勢整ヒ 刀痕妙 着色緻密ニシテ 孔雀石ヲクタクキテ製ス岩緑青 其他最上ノ繪具ヲ用ヒ 莊重ニシテ氣韻高ク 恰モ柳里恭ノ画ノ如キ粉色ヲ施ス 桃源ハ柳澤侯ヨリ俸米ヲ受ケ 安逸ニ消光スル身ナレハ 一個ノ

明治廿三年四月八日六十八歳ニテ永眠セラル

二代 瀬谷桃源氏

初代甚平桃源翁ノ男ニシテ 弘化三年郡山ニ生レ 明治六年父ト共ニ奈良ニ移ル 通稱梶藏 先考ノ號ヲ襲ヒ 桃源ト稱ス 父ニ刀法ヲ學ヒ 杜園ノ作品ヲ範トシ 研鑽スルコト數年 其巧之極致ヲ自得シ 青年既ニ妙手ナリ 嗣子梅源氏所蔵セラル 二代桃源ノ作根付十數個アリ 審ニ見ルニ 其刀法着色共 杜園作ト寸分異アラス 而モ氣韻マテモ 彷彿タリ 茲ニ至テ杜園ノ刀法ヲ傳ヘント云フヲ憚カラス 宜ナル哉奈良ノ骨董商人 二代桃源ノ作品ノ名ヲ埋シ 杜園作ト稱シ 賣ル 杜園研究ノ眼識者モ疑ハス買取ル 是ヲ以テ見ルモ 杜園作ト匹敵スルコト 以テ知ル可シ 二代桃源作根付 杜園作根付共ニ落款ナカリセハ 之ヲ撰別スルモノ誰カアラン 知ル者嗣子梅源氏一人而已ナリ

奈良市大字雜司

瀬谷 梶藏

一木彫高砂尉姥 壹對

右

皇太子殿下御結婚奉祝之爲メ

獻納候段御満足被

思召候事

明治三十三年五月十日

東宮大夫候爵 中山孝磨

印

根付刻ムニ日時ヲ忘却シ 唯名作ヲ得ンカ爲ニ 極力丹精ヲ凝シ 製セシカ故ニ 如斯名品ヲ出ス 殊ニ江口ノ根付ノ如キハ 杜園ノ作ト匹敵シ 莊重ナル点ニ於テハ 杜園ノ作品ヲ凌駕セリ

明治四年癸藩置縣トナリ 同六年家祿奉還セシニ因リ 奈良ニ移轉 東大寺大佛殿前鏡池ノ西堤ニ住居シ 遂ニ彫刻ヲ本職トス一爾來一層研鑽ヲ積ム 宜ナル哉其作品ハ 畏クモ 明治天皇之御買上トナリ 更ニ宮内省ヨリ屢々御用命ヲ蒙リ 無上之光榮ニ浴ス 明治十七年大和名流誌諸匠ノ部ニ

木偶 岡野松壽 森川杜園 瀬谷桃源

當時ノ妙手タルコト以テ知ル可シ

文政三年生 森川杜園

文政六年生 瀬谷桃源

桃源杜園ハ同時代ノ人ニシテ共ニ奈良彫研究者ナリ

杜園ト桃源ノ作品ヲ對照スルニ年齢ニ於テモ三歳兄ナル如ク 杜園ハ稍々勝ルト言ヘ共桃源ノ作ハ 杜園ノ作ト殆ト匹敵ス 桃源ハ今小路町 對山樓角谷定七方ニ宿泊スル 宮内官員又ハ貴顯ノ依頼品而已 彫刻スレハ 其作品ハ 皆東京ニ送ルカ故ニ 奈良ニ止マラス 唯瀬谷梅源氏ノ 保存セラレシモノ斗リナレハ 其作品ヲ實見セシモノ稀ナリ 更ニ東京ニ存在セル物モ 大正十一年ノ震災ニ大部分焼失シタレハ 桃源ノ作品尠クナリ 因テ桃源ノ眞價ヲ發揚スルコトヲ得サルハ 奈良彫之巨匠桃源ノ爲ニ 惜ムノミナラス 奈良モ亦杜園ニ次ク名人ノアリシコト 世ニ宣傳スル時期ヲ失シタリシコト遺憾トス 然レトモ幸ニ瀬谷家ニ所蔵スレハ夫レヲ審査シテ桃源ノ妙技ヲ 奈良人ハ天下ニ發表スル 義務アルモノトス 資性謹格 其業ニ熱誠ニシテ 閑日富雄川ニ釣糸ヲ垂レテ余念ナシ

褒状 木彫置物 梶藏

第五回内國勸業博覽會

明治三十六年七月一日

總裁大勲位功四級載仁親王

褒賞 五等賞 奈良人形 鹿置物 桃源

第十二回新古美術展覽會

明治四十年五月一日

總裁大勲位功二級貞愛親王

奈良縣ヨリ推選セラレ佛國巴里萬國大博覽會ニ出品セシニ好評ヲ博シ 忽チ全部賣約セラル

晩年六十二歳ノ時山林王北村又左衛門内親 茶室ヲ設ケシ故 千利休ノ像ヲ安置セント欲シ 北村所有林之檜材ニテ彫刻ヲ依頼セラル 因テ北村又左衛門内親并ニ支配人ト共ニ京都ニ上リ 利休ノ像ヲ寫生シテ彫刻ス 其像今尚北村家ニ藏ス 性謹厚ニシテ實生流之謡曲ヲ能クシ 又釣糸ニ親シム 明治四十一年三月廿日六十五歳ニシテ逝去セラル

三代 瀬谷梅源氏

二代桃源翁ノ男ニシテ 明治十四年四月七日奈良ニ生レ 箕裘ノ業ヲ承ケテ 十四五歳ヨリ刀法ヲ父ニ學ビ 更ニ亦帝室技藝員高村光雲翁之高足田中祥雲氏ニ從ヒテ研究スルコト數年 繪畫ヲ和田貫水畫伯ニ就テ習フ 巨匠初代桃源翁名工二代桃源氏ノ血統タル梅源氏ハ 十八

歳ニシテ既ニ名手タリ 爾來父祖二代蒐集セル數多ノ杜園作品ヲ範トシ 尚研鑽スルコト多年 眼識者歎美スル 奈良彫^一ノ刀痕豪宕ニシテ余韻アル作品ヲ出スコトニ熱中シ 遂ニ一刀彫之眞ノ刀法ヲ現ス

今奈良ニ杜園之流ト稱ス彫工數人アレトモ如斯 父祖ト共ニ三代杜園ト親交アリテ 其ノ刀法ノ極致ヲ自得シタルモノアルヲ不聞 只月ニ何回杜園ノ家ニ通學シタル良園ノ門ヨリ出タル人而已ナレハ 杜園ノ精神ヲ傳ヘンコトナクシテ 人形ノ姿ノミヲ模刻スルニ止マル 瀬谷一家ハ杜園精神ヲモ傳ヘテ 彫刻スルカ故ニ二寸斗リノ根付ノ人形モ生アル人カトモ見エテ 今ニモ物言ハン斗リナリ 故ニ杜園ノ刀法ヲ 眞正ニ傳フルハ瀬谷一家トイフベシ

梅源氏十八歳ノ作 乙御前銘貫英 詳註時和田實水氏ニ繪畫ヲ學ビシ折付貫英ト稱ス 刀痕之冴ニ驚嘆セリ杜園ノ作山ノ頂上トスレハ 九合目ニ達シタル感アリ 老來愈々熟練シ名作ヲ出サル故ナル哉 明治三十三年以來 共進會其他ニ出品シ賞牌并ニ感謝状ヲ受ケルコト數多アリ

資性温厚篤實ニシテ 風采曲雅精神修養之談話ニ趣味ヲ有シ 又閑日千手院山ノ松林ヲ眺メツツ煎茶ヲ點ス 昭和中華嗣子ニ業ヲ讓ルト雖モ 一刀彫ノ傳道ニ盡力セラル

四代 瀬谷桃源氏

三代梅源氏ノ長子ニシテ又梅源ト稱ス 父ヨリ一刀彫ノ巧ヲ學フコト數年 天稟ノ名手ハ杜園ノ作品ヲ模刻スルニ妙ヲ得タリ 恰モ二代桃源翁ノ青年時代ニ彷彿タリ 而シテ寢食ヲ忘レ其業ニ熱中ス 眞ニ杜園之流ヲ酌ムハ此人ナリトノ衆辭アリ

く、杜園存命中から連綿と続いていることを思い知らされることがある。この史料もその一端と認識できるし、戦前の杜園展には杜園宅に掲げてあった看板を火鉢にした物や、使用の鋸や道具迄が陳列されている。骨董商の玉林尚古堂などは杜園没後、その使用していた絵具類まで買い取ったという話を聞いたことがある。そこでもう一本、三代桃源が語った事柄を中心に大正年間何度か大阪朝日新聞の記事となった、奈良彫を昭和十五年に一本に書き集めた『奈良彫の資料』というものがある。ほとんどが水木要太郎の『杜園小傳』や竹林薫風の『奈良の一刀彫』にも記述されていることだが、稀少な奈良人形の資料として見逃し難い記述も多いので、ここに併せて収録しておきたいと思う。尚、文中杜園が大宿所前絵師として盃台等を調進したという件は、事実誤認であり、詳しくは先号に記した通りである事を付け加えておきたい。

尚、正岡子規の「人形をきざむ小店や菊の花」

という句は当時、東大寺大仏殿前の池畔にあった二代桃源の店のことであろうとの一文も別に目にとまったので申し添えておく。

(資料)

『奈良彫の資料』

奈良人形(大正六年九月六日大阪朝日新聞記事)

奈良に遊んだお方は角細工や張子の鹿などと安價にして粗雑なお土産物の中に交じりて特に檜材の木目も鮮やかなあの奈良人形を御覧になるでせう。簡樸にして清楚なるこの人形は奈良の一刀彫として世に聞えた春日有職の一であり圖柄のお能狂言物を主とした處にもそれぞ

瀬谷桃園氏

三代梅源氏ノ二男ナリ 令兄ト共ニ杜園ノ作品ニ就テ研究シ 一刀彫ヲ能クセラル 年齒未タ春秋ニ富ム青年ナレハ 將來名聲ヲ高ムル彫匠トナラン

三代梅源氏ノ令兄モ 奈良彫ノ名手ナリシナリ 瀬谷一家ハ初代桃源翁以來 奈良彫ノ聲價ヲ高ムル爲ニ 子々孫々業ヲ繼承シ 豪宕ニシテ余韻アル一刀彫ノ刀法ヲ永久ニ傳ヘント勉メラル

奈良名産ニ對シテ誠ニ稀ナル功勞者ノ家トイフ可シ 奈良名産沿革記編輯ニ當リ奈良彫ト瀬谷家ノ關係ヲ知ルコトヲ得タレハ

昭和十四年三月廿三日

郷土史家

藤田祥光印

識ス

以上は四代桃源の囑に応じて藤田祥光がまとめたものである。

瀬谷家に遺された史料を見ると、四代桃源が熱心にまとめ、奈良人形の史料を意欲的に研究しようとした状況が窺える。就中彫と彩色をいかに重要視したかがよくわかる。また初代・二代桃源共に、あからさまな師弟関係こそ無いが、森川杜園に私淑し、杜園追慕の情切なるものがあつて同家には、杜園の書簡集(但し瀬谷家宛のものではない)や杜園根付の雛型(同家では杜園より贈られたものと伝える)、杜園の遺影が蔵せられている。おそらく精力的に杜園資料を同家が蒐集していたのであろう。杜園という人を絶対視することは近年のことではな

れの特徴や物語が傳はつて居るのです。

奈良人形の特徴としては他の彫刻が實體の寫生風を重んずるに反し飽くまでも氣分本意の形態を輕視して思ひ切り鋭く深く刀角を露出した點である。それは一刀彫の名の示すやうに。さればこそ莊重なる古雅な趣より轉化し出したる軽い滑稽味や如何にも洗練せられたる通俗的の雅致が現はれて来るのです。尤も現在の作品が盡くこの通りだといふのではありませんが其理想とする處は此處にあり且つあらねばならぬと思ひます。奈良人形の大きさが一寸前後より一尺迄を限りとなつたのはその為めで尺以上の大物では刀の味が巧に現はれません。即ち刀以外の刃物鑿などを使用する事となれば所謂簡素なる雅致を没して全く一刀彫の特徴を失うことになるのです。

斯程刀角を鮮明することに苦心する奈良人形に彩色の施されるのは一見矛盾するやうに思はれますが土佐派の繪に用ふる岩繪具を膠で溶いて彩つた人形はいかにも有職にふさはしい趣味に富んだものなのです。殊にこの彩色が自然に古びて淡い手摺れの光澤を帯びたものは一層此の感を深くします。それこそ茶人好みとも評しませうか。此の彩色と調和して益この人形の雅趣を増すものは檜材のすっきりとした木目枇杷色とも言ひませうか軽快な淡黄色の木膚の澤、この二つです。

即ち此の人形は檜材に限つたものなのです。更に詳しく言へば檜の古材に限るのです。御承知の通り奈良は古社寺の多い土地ですから古い堂塔伽藍の再築や修繕によつて生ずる檜の古材が可なり多く出ます。これを材料として彫刻するのですから實は漸次に材料難に陥りつつあるのです。さればといつて新材では枇杷色の木膚が現れないのみか樹脂や灰汁が滲み出して繪具の色を損します。

最も古い時代には全つきり繪具で塗りつぶしたものださうですが木

目を賞美するやうになつてから漸次に彩色の部分が増加したのです。成る程木目と彩色との調節から生ずる美そのものは此人形の生命かも知れませんがこんな檜材が無限にあるものでせうか。此の道の人の中でも心あるものはその代用たるべき木材を寄々探し又は調査して居ます。即ち尾州の檜材、大阪では浮木といひます。あの川筋に漬けてあるものを適量と認めましたが新材の悲しさには餘りに色が白過ぎます。又材は二の次にして主たるものは彫刻その物に在るのだからとて北海道産のツブの樹を用ひた向もありましたが出来上つての風格がひどく見劣りするさうです。それもその筈ツブは普通下駄の材料ですもの。奈良人形と下駄一寸考へても可笑いやうな氣がします。詮じつめて来ると材料は如何しても檜の古材に限りますが一刀彫の最初の人は如何してこれを手に入れたでせうか。それには一刀彫の由来を探ねなくてはなりません。抑も奈良人形は古から春日若宮御祭禮坊用の鳥臺田樂法師笛工の花笠に使用した高砂、翁、嬬、狸々、三大臣等の木偶に始まつたものなのです。そして此彫刻に従事するものを春日檜物師と稱へて世襲の職業だったので。春日といへば伊勢の神廟などと同じく二十一年目毎に神殿を造営しましたからこの際檜の古材を拂ひ下げて彫刻の材料としました。奈良人形が魔除になるとの俗説はこの春日神殿の古材を用ひたからである。かうして檜物師が極めて朴素な木偶を彫刻して居る中に寶永年間に岡野松壽が現はれた。當時は金春流の謡曲が奈良に最も行はれた頃とて木偶の意匠を専ら此方面に取りました。今日能狂言に因む人形の多いのはこれが原因です。それには謡曲趣味と奈良人形の趣味とが相符合する点があつた爲には相違ありません。決して一時の嗜好に投じた譯ではありません。

寛政年間に降つては九代松壽保伯が出でて種々の能楽人形を作り之

です。器械が作製するのではないのだからこれは出来ない注文です。美術品が玩弄品かは此の辺からも解決する必要があります。

名人と言はれた杜園の作品でも第四回の内國博覧會に美術部出品を断られたさうです。作物の出来不出来ではなく彫刻としては彩色が施してあるからです。更に漆工部でも受付けぬ中途半端なものと思われるのです。尤も大正四年の大典記念博覧會には良宗氏の作品が美術品として出品されました。要するにあらゆる藝術が萬遍なく愛好されるやうになつた今日奈良人形の前途は洋々たるものがあると共に暗い影をも伴つて居ると見るべきです。この問題を解決するのは時の流ればかりでせうか。

巨匠杜園 (大正七年七月十五日大阪朝日新聞記事)

奈良一刀彫の名工故森川杜園の二十五回忌追善供養は愈今十五日奈良公園奈良俱樂部にて挙行、遺物展観には彫刻絵画其他の作品百余点の出陳あるべし。その流れを酌む三笠山麓の瀬谷梅源氏は語る。

世間では私の父(二代目桃源)を杜園翁の高弟だと云つてゐるさうですが實際は世にいふやうな師弟の關係があつたものではありません。と云つた許りでは分りませんが、天性器用な杜園翁が岡野松壽の作品などを見てちよいちよい彫り始めた頃私の祖父(初代桃源)や翁と友人だつた三人のものと一緒に倣つて刀を持つやうになり時には互に作品を持寄つて批評をしたりしてゐる内杜園翁のみがメキメキと腕を上げたのです。そんな訳で私の父は自然幼い頃から奈良人形に興味を有つやうになり十二三歳の頃から弗々製作を始めました。勿論最初の手解は初代桃源がしてやつたのでしやうが一通り腕が出来てからは主として杜園翁の作品を手本に一刀彫の極意を研究したものらしいです。で形式上から云つては師弟の關係はありませんが本質的に云つて立派

を置物、香合、根付等に意匠して彫刻しました。その後天保年間に出たのが斯道中興の名人と言はれる森川杜園です。従来の彫方に一家の刀法を案出して遂に今日の如き一刀彫の精華を發揮したのです。杜園は繪も巧でいろいろ逸話も傳はつて居ります。晩年には専ら宮内省の御用品を製作して居たさうです。現今では杜園の一派に木島良宗氏等三名と松壽の一派に二人の彫工があつて各数人づつの弟子を養成して居ます。

人形の資材が限局されると共に刀角の鮮明を第一要件とした結果は彫刻用の刃物をも限局することとなりました。普通に看板包丁と稱して看板板を彫る職人が使ふ包丁か又は切出に限ります。此の産地も北國ものを第一として京の小物打なる良清、義次ものを用ひます。堺や手近の奈良刃物などは全く役にたたぬさうです。必ずしも良く切れる切れぬに拘はらず仕上げの切れ味が違ふのです。

最後に奈良人形は厳格なる意味に於て美術品でせうか。玩弄品でせうか。此の問題の解決は人形師自身の人格抱負技量に依ることは言ふまでもありませんが一般鑑賞家の觀念も参酌せねばなりません。需要先を調べると三越や奈良の物産屋、及び素人の好事家を自當として製作して居ますが総額から言つては極めて微々たる有様です。大勢を言へば玩具的に製作して賣上総額を増す傾向とも見られますが方法が簡単であるだけに荒彫ですつかり形を極める必要上弟子の下作を師匠が仕揚げて銘を入れる訳にもいきません。自然的に粗製濫造を防がれるとも言へば言はれませうか。

現に今年の春クリスマスプレゼントとして神戸の外國館から「尉と姥」の注文があつたさうです。大きさを一寸として其の数五千、これを三十日間に送つてくれとの事でしたが言ふまでもなく謝絶したさう

に其流れを酌んでいます。

恠う云ふ風な間接的な弟子は他にも幾らもある事だせうが尚翁には晩年になつて正式に弟子として訓育した者が三人あります。其一人は本縣師範學校及び郡山中學に繪画の教師をしてゐた故山本勇吉氏、それから此程物故した市内水門町の人形師中條良園氏(此人の弟子に木島良宗と云ふのがあります)モウ一人は目下東京美術學校彫刻部の教授をしてゐられる水谷鐵也氏(号佳園)です。

杜園翁の正統は今絶えて居ります。生前子がなかつたものですから姪和藏を養ひ(森川杏園と云ふ)東京美術學校へ入れてあげました。此人は象牙の方が得意で良い腕前になつて歸つて来ましたがたいした仕事もせず翁の亡くなる確か二年前に死にました。で今大阪天王寺で彫刻を業としている山本杏園と云ふ人が翁の夫人側の甥とかに當り杜園側では元奈良裁判所書記で後朝鮮で判事となつた森川正任氏が其後だとせられてゐましたが惜しい事には数年前に亡くなりました。

杜園翁の家は中新屋町大隅骨董店附近です。勿論建物は變つて居りますが裏には立派な能舞臺があつたりして常に緩やかな生活をしてゐたさうです。天性温雅で上品で几帳面で交際が中々上手かつたやうですが流石に何處かに變つた所があつたさうです。教へるのが面倒だつたのか或は別に考へる所があつたのか弟子なども殆ど取らず晩年人に奨められて漸々前記三人を通はせた。それも月に何回とか云ふ位のものだつたらしいのです。好い後継者のないのも無理はありません。

翁の作品は之を前期後期の二つに分つ事が出来ると思ひます。即ち前期と云ふのは翁が三十歳前後の最も油の乗つてゐた時代のもので一刀彫の純粹の味は此時代の作品に遺憾なく現はれてゐます。後期と云ふのは翁が宮内省の御用を仰付かつて正倉院御物の模造品を作つた後

の作品で勿論腕は上達し刀に一種の寂びが付き整った美しさを増しましたが丸彫のものを真似た結果何うしても刀角に丸味が付き以前のやうな豪放簡素な趣が少くなりました。元より孰れが善い悪いの評価は出来ませぬが吾々人形師としては前期のものを多く手本としてゐるのです。

翁の作品は最も得意な鹿を始め能楽人形舞樂十二支其他の動物人物等大小数多ありますが大作は漸次東京方面の富豪に買取られて肝腎の奈良地方には細かいものや贖物などが残ると云つた有様で頗る遺憾な次第です。幸ひ私方には翁の死後譲り受けて買ったものが約二百点許保存して居りますが其中最も大作で傑作なのは第一回内國勸業博覧會に翁が出品して金牌を貰うた子持鹿です云々

北島男四む

翁は晩年模刻に妙を得、東京博物館(帝室博物館の前身)の命で正倉院の御物、各古社寺の國寶等を模造し些も原物と違はなかつた程左様に多大な苦心を重ねたものであつた。東大寺南大門の國寶狛犬模造の際はその前に筵を敷き幾日も幾日も寫生に怠らず法隆寺の九面觀音や金峰山寺の経箱は原物と並べて孰れが眞實やら嘘やら分らなかつたさうで面白い逸話も傳はつてゐる。何でも明治十一年頃法隆寺の土偶(五重塔内塑像人形)を模刻した時東大寺の龍松院(俗に赤門といふ)に眞贋両者を陳列して衆人の批判を仰いだことがあつた。それは一は土、一は木であるから如何に古色が同じでも重量で分る筈だと持上げた者も尠くなかつたが重量が同じにしてあるので鑑別が出来なかつた。折りしも古物博通で知られた北島治房男が来て「十二分ない。そんなことがあるものか。法隆寺のは塩が這入つてゐるから嘗めて見ればスグ分る。」と打返し打返し眺めた揚句繰返して尻の方を嘗めて見た男

若い時に宮崎豊廣等開いてゐた繪画講習所で習つたものださうで素人離れがしてゐる。奈良一刀彫は松壽の流れを酌んだ神林東林氏が亡くなつて其派が絶えなんとし今は杜園派の瀬谷梅源、木島良宗氏等が榮えてゐる。良宗氏は一刀彫成金で清水通りに居宅を新築し盛んにその作品を東京の三越に送つてゐる。氏の門下に山川宗山といふ青年がある。素人彫刻界の名手持醫學士などは其の天才を稱し將來に矚目してゐる。一刀彫は所謂奈良人形で主として能狂言、舞樂、雛人形、尉と媪、達磨、鹿等を彫刻するが近來需要が増して来た。然し彫刻のこゝとて澤山は出来ず又後継者も得難いので今一段の發展はむづかしいさうだ。

南都に誇る一刀刻の話(大正四年十一月)

凡そ藝術に身を委ねる人々が後世に傑作と謳はれる作品を残すには他に知られぬ不断の錬磨を拂ふものがある。我が奈良人形も僅に春日有職の手になり神社に関り合ひを持つグループのみの愛玩物であつた域を脱し廣く世の視聽を蒐めるに至つたのは近代の名工森川杜園の出現であつた。杜園が一刀彫に精進し名をなすまでに至つた徑路を眺める時其處に偉大な天才のひらめきと藝術家の持つ趣味性の深遠さを物語るものがある。

黒船が初めて浦賀湾頭に姿を見せ鎖國の夢を破つたのは安政元年の事である。爾來國內に漲る不安な空氣の裡に文政三年を迎へた杜園は同年六月二十六日奈良市井上町に生れた。幼名を友吉と呼び實の名は扶疏と謂ひ杜園は雅号である。幼少の頃から非常に畫才に富み暇さへあれば繪筆に親み十三歳の時初めて内藤其淵と謂ふ画家の門を潜つたが二年の後には師をして舌を捲かせるやうな作品を発表したので當時の奈良奉行梶尾(野)土佐守は杜園の画才を愛し同人が井上町に住んで居た關

は「此方が塩辛い、これが原物だ。」といつたらニッコリ笑つた杜園が「それは私が拵へました方です。」といつたので流石の男も凹まざるを得なかつたさうである。

因に杜園の墓は市内北袋町普光院にあつて碑面には「杜園森川扶疏、妻ひさ之墓」と刻し翁の面目躍如たる辞世がある。曰く
罷出てあらぬ手業を世に残しさも恥しと身は隠れける

杜園の大作

奈良一刀彫の特色は一刀でスカッスカッと刻んで行く處にある。随つて大作は珍しく根付け其他の小作にその特技が現はれ刀の味も出るのである。近來の一刀彫は唯形式のみで二刀三刀は愚か甚だしきは数十刀もかけて体裁を整へてゐるから刀の味は見たくとも見られない。

此点に於て杜園は絶後であると共に一刀彫は最早亡滅し去つたといつて可い。杜園の大作は余り多くを有せず鹿と武内宿禰が世に知られてゐる。宿禰は白井総本家たる帯屋(故白井英通氏)の遺愛品で往年昭憲皇太后行啓の際御用命を蒙つたそれと同じ形だと傳へられてゐる。

美術工芸界(大正八年二月十日大阪朝日新聞記事)

明治二十八年に再興した春日繪所は大和繪の和田貫水氏が受け継いでゐる。氏は住吉派の故守住貫魚畫伯に學び奈良へ来て早や二十年以上にもなる。昨年依水園主等主催の下に百画會を設け彩筆を揮つてゐるが氏が近來の狙ひ所は大和繪近代の巨匠で文化四年丹波市で浪士に斬られたといふ冷泉為恭であるさうだ。故竹内久一氏の高弟竹林高行氏は東京で賣らんとせず奈良にあつて仏像の作や修繕が五百体に及んだが御大典以来プツリと止めて了つた。何故かと聞けば「逆も吾等如きものの及ぶ所でないからだ」と云つてゐる。氏は中庸を得べく履中齋と号し念仏三昧裡に刀を揮い傍ら繪筆をも舐めてゐる。何でも

係から神代記に因んで扶疏(疏)の名と杜園の号を與へたのであつた。昨秋秋商品陳列所で開かれた奈良人形展覽會に出品された杜園の画稿を見たものは一様にその非凡な画才に驚嘆の瞳を見張つたものだ。洵に杜園の一刀刻が他に比し彩色の妙を極めるのも斯る素質に恵まれてゐたからであつた。

杜園は又趣味性の裕な人で十七歳の時から山本淺右衛門、櫻田治部春鷹や大倉八右衛門等の名流に就いて狂言を學びその蘊蓄を極めたが十八歳の時初めて彫刻をもつて身を立てようと決心し木彫を初めたが當時は一刀彫の名手悉く没し師と仰ぐ人が見當らないので止むなく松壽保伯等の遺作品について刻苦精勵、熱心に研究を續け遂にその刀法等巨細に自得したがその努力は並大抵の事ではなかつたといふ。斯て一意専心奈良人形の製作に精進したので漸く技倆が進歩し安政元年初めて春日若宮の大宿所前繪師職となり田樂法師の笛吹笠や坊用の島臺製作人形等を調進する身となつた。

四十七歳の時清水谷侍従が春日神社神事勅使として参向になつた砌、明治天皇の御土産物として舞樂、納蘇利等を謹製申し上げたを初めとして其後も屢々皇室の御用を拝命し明治に入つてから各所に開かれた展覽會に出品し授賞した事が數多い。殊に明治二十五年米國シカゴで開かれた萬國博覽會に牡牝の大鹿を出品して世人を驚嘆せしめたが明治二十七年六月二十六日

罷り出てあらぬ手業を世に残し

さも恥しと身は隠れつる

の辞世を残して世を果てた。

實に近年得難い名手杜園の持つた趣味性は如何に其作品の上に影響したかは彼の作品に接したものの等しく首肯するところで例へば舞樂を

彫刻する場合自らの深い体験に基調して彫り付けて行く刀痕は道に人に迫るものがあつたと謂はれ肩から腰部に流るる線の微妙さに至つては後世未だ之に追従するものがないとまで言はれてゐる。兎もあれ名工杜園の歿後久しく萎微沈滞に喘ぎつつあつた一刀彫奈良人形は漸く周囲の刺戟によつて今日の盛況を呈し今や國際的に藝術境を開拓せんとしてゐる。千古の緑に包まれた奈良の地が一刀彫の發祥地として世界に謳はれる日もやがては恵まれよう。

三聖代名作展大和は輝く(昭和十二年五月八日)

明治、大正、昭和三聖代七十年間の名作美術展覧會は目下本社主催の下に大阪天王寺大阪美術館で開催されて居るが三聖代を通じて美術界に君臨する珠玉中の珠玉のみ六百点が出品されてをりまさに美術界空前の一大豪華版を現出してゐる。この粲然と輝く寶玉中にわが大和が生んだ二代名作家と奈良が育くむ二画伯の作品が含まれてをり鋭い光彩を放つてゐる事は美術の古都として大きな誇りでもありまたこれら不世出の名人達を育くんだ自然の土地や草木にも感謝すべきであらう。

資質既に幼時に香し多藝多才行く處すべて非凡 故森川杜園翁を語る

先日某氏が牡牝の鹿の木彫の置物を金五圓也で掘出して来た。彫りの一刀一刀にえもいはれぬ藝術の奥から流れる香りがしてあまり立派な作品なので友人に見せたところ「これは立派な作品だ。五十圓では非賣つて呉れ。」とのこと、一躍買値の十倍の値に飛び上がったので少し心が働いたが又急に惜しくなり手離さず床に飾つて楽しんでゐた。此の家の女中さんが毎日床の拭掃除をするのにこの鹿の置台を水拭きしていたところ或る日の事寝てゐた牝鹿の腹の塗粉がぼろりと落ちて現はれた二字が「杜園」：喜びのあまり飛上がつて前の友人に話を

から多方面にわたつていかに技藝に堪能であつたかが覗ひ知れよう。

作品が酒杯のお對手 値切つた者へは絶対渡さぬ

杜園翁が奈良人形に名聲を馳せたのはずっと以前からであつたが其技藝の円熟して更に模古の技倆に一生涯を開いたのは明治以後からであつた。明治九年博物局から正倉院御物の寫圖を命ぜられ、ついで大佛南大門の石の狛犬の模造の命を蒙つた。この時は厳冬で頬を切る寒風と手足を凍らす薄氷が奈良の街々を包んでゐたのであるが厭ひもせず當時の博覽會社へ毎日出頭して一枚の毛布と一脚の床几を借り受けて苦心に苦心を重ねて遂に成功、爾後正倉院開扉の度毎に寫圖模造の御用を命ぜられた。

著名な作品は内國勸業博覽會に出品した明治十年蘭陵王木偶、鹿の置物、明治十四年龍燈鬼、明治二十三年笑假面、腫假面、アメリカシカゴ府萬國博覽會へは牡牝大鹿を出品して日本美術に碧い眼を驚嘆せしめてゐる。その他の製品では明治十年宮内省御用の武内宿禰像、今回の美術展に出品されてゐる晩年作の橋辨慶等があり斯界最高峰の作品として世に知られてゐる。

杜園翁は性質が非常に温厚で人とは争はず乞食にすら愛想がよかつたといはれてゐる。非常な酒豪家で晝と夕の二度酒を缺かしたことはなかつた。酒の肴には魚の子が好きで魚の種類を問はず魚の子さへ持つて行けば非常に機嫌が好かつたといふ。出来上つた作品を食膳に置き方向をくりくりかへて酒をチビリチビリと飲むのが唯一の楽しみで翁の作品が何れの方向から見てもムラの無いのは出来上つた作品の一つ一つが食膳で酒のお對手をしたためであらう。

この名人にも経済困難の時代があつた。酒を買ふにも金は無し、作品を持ち出しては南袋町の谷川氏(當時は酒商を營んでゐた)方から

したところ「それぢや五百圓で譲つてくれ。」と切なる頼み、これで買値の百倍になつたわけだが「いやたとひ千円でも決して手離さない。」と遂に仲のよかつた友達が喧嘩してしまつたといふ話。この稀代の名人杜園は文政三年六月二十六日奈良市井上町に生れた。幼名を友吉と呼び非凡の人物なる資質はすでに寺子屋時代から現はれてゐた。友吉は非常に學業に熱心で悪童どもとは共に遊ばず暇があれば繪をかくことを最上の楽しみとして紅殻を購ひ藍玉を乞ひ彩色などを施して子供達に與へてゐた。また檜木屋で切屑を買ひ鰻割の包丁で彫刻をして楽しんでゐた。始めて繪画の師を求めたのは天保三年友吉が十三歳の時でわづか一、二年の間にその技を見るべきものがあつたといふ。當時の奈良奉行は梶野土佐守といふ。深く友吉の奇才を愛して彼が十六歳の時に晝の御用を命じ友吉十七歳の時井上町に住んでいたゆゑに神代紀の文に因んで扶疏の名と杜園の号とを與へたのである。天保十七年彼が十八歳の時にはじめて彫刻をもつて身を立んと志しこれより奈良人形にかかつた。嘉永三年三十一歳の時家業の煩ひを厭がつて家を弟に譲りこれより中新屋町に移つたのである。安政三年三十七歳の時から春日若宮の大御(宿)所前繪師職となりこのころより春日有職奈良人形師を命ぜられた。

杜園はまた狂言でも一家をなす資格があつた。十七歳の時から高畑町の山本淺右衛門につき、のち梅田春鷹について學び大倉八郎右衛門に入門、山田八郎右衛門の名跡を継いで山田弥兵衛と稱した。杜園が得意中の得意藝である花子は二十四歳、釣狐は三十六歳、古稀の祝に自演した枕物狂は四十一歳の時に免許を得てゐる。技は非常に器用で殊に端物狂言に妙を得てゐた。和歌に堪能、手蹟拙からず、三味線、胡弓また習はずしてこれを試み茶花の道また嗜みありし、といふのだ

作品と交換に酒を購つてゐたものである。これがため谷川家には現在でも翁の作品が一番多く藏せられてゐるとの事である。

このやうに酒好きであつたが一たび仕事にかかるや酒の香りを忘れたものの如く眼を輝かせて全精神を刀の先に集中したものである。或時も妻君の病氣を醫師が見舞に來たが彼は醫師の來訪も妻の病氣すら忘れたものの如く數時間刀を取つて作物をじつと睨みつめてゐた。又一面非常に厳格な性質の持主で作物の價值などはその見積りを減ずることなく或時人に頼まれて玄龜を彫つたことがあつたが其彫刻が出来上つた時に値切つたので「價が高いと思はれるので値切られるのだから。高いものなら別に買つていらぬ。」と詫びてもこれを渡さなかつたことがあつた。

六十七歳のころ間歇熱を病んで身体が衰弱していた時、木津川の架橋式に招かれたが翁は醫者の戒めるのも肯かず狂言を演じたのが命脈を縮めた近因といはれてゐる。

晩年有志の發意により聖武天皇の御像を長く南都の神寶に傳へんとして圖案は出来たがなほ飽きたらぬ点があつたので時の知事小牧氏がこれを九鬼隆一氏に諮つて考證し正確な圖案が杜園翁の手にはいつたが着手におよばずして明治二十七年七月十五日七十五歳を一期にして遠逝したのは遺憾の極みであつた。墓は北袋町善光院にありその辞世に「罷り出てあらぬ手業を世に残し さも恥しと身は隠れつる」の句があるがあらぬ手業どころか三聖代の名作として久遠の光を放つてゐるのであるから翁にあの世で大いに杯をあげて安らかに眠つてもらひたい。

翁には子がなく甥の和藏氏を嗣とした。和藏氏は杏園と号してはじめ奈良師範に學んだが後東京の石川光明の門に入り象牙彫を學びその

論文

続々・奈良の人形

岡本 彰 夫

(はじめに)

奈良人形の特徴というか、奈良人形が具備すべき条件は、一に質朴(彫・彫刻)、二に絢爛(彩・彩色)、三に雅味(風・風趣)、四に趣向(体・総体)であると私は考えている。それは悠く奈良人形の始まりが神事人形であることに起因する。その故は、人があまりに多く触れる事による穢の発生という事を念頭におかねばならない。つまり自然が最も神慮に叶うということなのである。人為を施さぬ天然の清浄さを第一と考えた我々の祖先は、神事琴の「和琴」には楓の琴柱を用い、神々へ献供の机は「栞案」を用い、絢爛豪華な絹織物の装束の上に麻の「小忌衣」をおつて神事の奉仕をしてきた。

自然の趣を最上とし、清浄を宗とする我国「神道」の営みを考えずして奈良人形の所謂「一刀彫」の持つ意味は解せない。

つまり一刀彫とは、ほとんど人為を施しておりませんという、神への表示なのである。

本稿は当初より比較的小おらかな論の進め方をお許し頂いている。今回は奈良人形の始原と、この人形の風趣を頑なに伝承し、そして芸術品として発展させた岡野松寿家への試論を重ねさせてもらうことにした。

異なるもので、奈良人形の始原とは考えられない記事である事を申し述べた。

しかし、「鎌倉遺文 補遺2」収載の、大乗院坊官・福智院家文書「南都新制條々事書」(補八七六、嘉祿二年正月)に奈良人形の始原を立証出来る文書を発見した(春日大社宝物殿松村和歌子主任学芸員の示教による)ので、長文ながらここに揚げ、些か考証を加えてみたいと思う。

南都新制條々事書

〔僧侶新制〕

〔嘉祿二年〕

〔新制〕

南都新制條々

一 所從事

嘉祿

元久新制云、僧綱出仕之間、僧正法(服)時(從僧四人中童子二人、大童子四人)、純色之時(從僧三人、大童子三人、中童子二人)、法印(大僧部)法服之時(從僧三人、大童子二人、中童子一人)、少僧部法眼律師法橋法服之時(從僧一人、大童子二人、中童子一人)、純色之時(從僧一人、大童子一人、中童子一人)、已講以下凡宿法服之時(從僧一人、大童子二人、中童子一人)、但有堂上之役之時者、從僧一人可具之、固守此員數、不可被違亂、寺邊着付衣、裏出行之時、已講(三人)、五師成業(所從二人、所從一人)、花族成業非成業、(所從一人、西座圓堂、非圓堂、所從二人、凡人圓堂、所從一人)、凡人非圓堂都不可具所從、但雨中之時、笠差之役人者非制限、兩堂大十師(所從一人、小十師以下)、都不可具所從、雨中之時、笠差之役人者非制限、

(奈良人形起源考)

奈良人形の起源は、春日若宮の例大祭「おん祭」に於いて演じられる「田楽」の「花笠」に飾る人形であり、祭礼前日に田楽衆に対して行われる「装束賜り」の饗宴の席上、飾り置かれる「盃台」を始原とする話は、別に何の抵抗もなく罷り通っている通説だが、これら造花と共に飾られる人形が、保延二年(一一三六)の祭礼始行当初迄、さかのぼりうるのかどうかという事を、竹林薫風氏はその著「奈良の一刀彫」(昭和五三年・私家版)において、春日社家日記の建久三年(一一〇八)九月十六日の条、「若宮手水屋顛倒留居下女死去了」に「又立竹棚下二立人形、此棚竹八本、鋤一口、紙三帖ハ彼死人之子息童力壽丸所分也、但棚人形作事巡檢等役之」とある事項を示され、奈良における人形制作の可能性を示された。

しかしこの一文は春日社家日記に詳細記事が見当たらない事を、本誌一五号(二〇〇四年)収載の「奈良の人形」について触れ、次いで一六号(二〇〇五年)の「続・奈良の人形」において、先の事件が永仁四年(一一九六)に春日の若宮神主祐春のまとめた『若宮神主家勘例』に誌されている事を明らかにし、更に等身大の人形を用いて、死穢を祓った四例を紹介し、これらの人形は「祓具」であつた事と、奈良で製作された物か否かは判然とせず、加えて祭礼に用いる人形とは全く

同状云、中童子、裏出行之時、不可具所從、晴出仕之時、敷皮持并雨中笠差者非制限、但尋常中童子之外、於夫重等者、都不可具所從、已上元久、今制同之、

一 乗物事

元久新制云、於寺中僧綱以下不論娶晴都不可乘屋形輿、於寺外者、裏出行之時、僧綱并宿老之人者、可隨宜、已講成業等若少之人、好不可乘輿、但於晴出仕并病痾之時者、非制限、縱雖爲僧綱、於若少之人者、參社等之時、常可爲步行、是皆爲舊例之故也、又除僧綱已講花族成業并若達之外、凡人西座之成業以下、不可乘四方輿、衆又少僧。以下輿之莊殿近來花美過法、外陳之金物連子式外之朱丹等、採色可停止之、

已上元久、今新制大概同上、但彼狀少僧都以下與莊殿過差制之、於今度者、貴所之外、一向可令停止件莊殿過差也、又非貴所并大臣之子息者、不用外連子、以組懸簾之事同前、同元久制云、西座成業以下不可乘四方輿云々、今制云、晴出仕之時者聽之、

一 衣服事

元久新制云、貴賤上下僧侶二薄衣二小袖并有文小袖、衆上品美麗長絹付衣不可着之、又非法服之時、不可着大口、已上元久、今制云、純色衣裳袈裟用中下品絹例詞精好及綾一向可停止、但除維摩會并御八講。論近着五帖之日、非晴時者隨宜、可用布等身衣練袈一向用之、於練衣練袈者、不論冢家人任意可用之、付衣并袈裟同可用中下品絹、於袈帶者、一向用平絹、吳綾唐綾之類一切停止、更勿忘綾三綱者着平袈裟之日、必可用表袴、從僧裝束者、衣裳袈裟

同用中下品絹例調精好及織衣等皆停止之、於衣者裏之有無可隨宜、指貫可爲平絹志、良綾、更不可着之、凡於指貫者、注文法服出仕之外、不可着之、褻出仕之時、用狩袴打袴表袴練裳等、於衣者惟鈍布等身衣可任意、

禪衆者、吳綾唐綾薄衣停止之、大十師近來恣着美絹薄墨染付衣之條、已似忘先規、儲任舊可用國絹之椎鈍付衣、兼又於絹五帖袈裟者、大十師之外不聽輟着用、但雖小十師已下、晴出仕之時者、非制限、但停止美絹可用魚絹、又布衣者停止細布、可用龜布、褻時不可着薄衣、凡項年以來、禪衆裝花麗過法律學無差、尤可令確禁、

中童子如元久新制、其狀云、中童子以下直垂都可停止裏、兼二小袖唐綾并綾小袖大口不可着之、褻之時、任當世之儀可用直垂、於水干袴者不可着之、於大童子者、且任公家宣下之狀、不可着綾并絹紫衣、

一 麗物事

元久新制云、塗足駄頗過法、於向後者改本形、可同北京之足駄、緒草(草)以前、又三緣尻切、非圓堂并禪衆以下不可用之、縱雖爲圓堂以上、褻之時、不可必用三緣尻切、

已上元久 今制同之、

一 東西金堂修正修二月造花過差事

元久新制云、地盤寸法長總尺二尺五分、廣一尺八寸五分、此外雖一寸一分、更不可加增、先於禮堂紮定寸法之後可備佛前、

水曳爲莊嚴頭之沙汰可送之、瓶花之時者、非沙汰限

兼於錦水曳一向停履畢、又以色々之糸置種々文事、同可停止之、

銅鐵之水永以可停止之、於紙障并張水者非制限、

一 夜莊嚴事

大佛供餅事、員數有限、立佛前之外、不可致過分之沙汰、次毗沙門供西金、大將供東金、各可限參石、且代々起請如此加增何故哉、五具調鉢事、員數任例、打敷絹可用普通絹、勿嫌之、餅立事、白米參斗、酒二瓶子、菜五種、汁物二、以生新可致沙汰、此外事一切停止之、

火炳事一向可停止、此條且爲新儀之故也、

諸堂上分餅一所不可過一枚、兩大行事分員數、可任先例、行事主事上品者一夜布一端袋米一也、而合莊嚴之時、人別可取彼一端一袋之由、行司僧令存之條更無其謂、依頭人之不階省宛兩三輩之處、面々一分之所役、何所助哉、兼又中下品則法可隨力堪而已、

中行事、古年重等催莊嚴之間、無左右不可懸四目、決定可動之輩、令遁避其役之時者、觸子細於大行事、可致沙汰也、又不願當年動否之人、依倭心廣差、催役人之條、甚以不賞、隨定員數可加催役、所謂一堂十五人欵、惣自由沙汰一切停止之、是則佛神事聞如之甚也、堂存等閑乎、

次神官等、未居其職之以前、猥以風聞之詭暗送札之條、奸濫之基也、兩堂誼諱之源、殊可令用意者歟、

次堪動仕之輩、設強々之緣、可通莊嚴之役之由乞請之條、能所共ノ不賞尤可加嚴酷沙汰也、

抑夜莊嚴問事、且去文治年中八箇條起請(詳)于別紙、云彼云此、旁勿遺失而已、

一 若宮祭問事

田樂裝束唐綾豎文砂織物綾等水干并織指貫紅葉二色一切停止之、錦繡金銀珠玉等之風流、泥繪構物下袴腰上差等同以停止之、又宿院・國分酒肴等同前、

瓶風流之中、牛馬人形合不可過三鉢、兼屋形車各可限一、不可及二三、於細々之禽獸鳥類等者、非制限、已上元久今制云、木花長三尺草花二尺、以之可爲至極、又至三種櫻并梅萩薔薇款冬者、不可有下草、兼以十二種本花不可用于下草、但椿松柳鷄冠木竹細々草花之類、用于下草事可任意、

次屋形者、不可過棟二、以造繼號一字之條、更無其限、縱雖造繼、縱雖各別、唯可論切之、大小何軒謂棟之離合、仍一向可限棟二也、又二階屋同可停止、

次牛馬人形合不可越四鉢、元久新制三也、而今度略四、人形長廣定三寸、牛馬准之、半土人形板人形各停止之、

地盤廣元久一尺八寸五分、而今度略四

除貴所御莊嚴之外、不論良家凡人一年中不可兼動兩堂、次守花之座坪立之、勿亂次第、或挑東西而致過分之營、或痛超越而忌修學之妨、付內付外、有告無德、仍兼動并亂座之條、永可停止之、

次諸寺諸山及寺邊小持佛堂等之莊嚴面々相營、造花事自及本寺之煩、一向可停止、縱雖難點止、可用瓶花蓮花之、

一 新堂童子事

凡以酒宴與遊爲本事、非只諛譁鬪誇之基、兼爲參社入堂之妨、嚴重佛神事豈可然乎、尤可令停止、早爲本所之沙汰、可被觸堂師也、

次迎事、只爲本房之沙汰、以房中兩三之輩可迎之、濟々圍繞甚有何益哉、

次髮洗事、同爲本房之沙汰、就私便所可令洗之、更不可及堂師等之口入、如此事、依爲過分之營、每人遁避尤以不便、殊可被禁過、

件條々、治承・建久兩代起請如此、尤可爲龜鏡、兼所々酒肴近年殊以過差尤可定則法、

十八日酒肴折櫃口七寸陽戶酒肴折櫃口六寸五分青木酒肴折櫃口六寸各不可施畫圖、但如不志繪者、非制限、

馬長事同可守建久之新制、件狀云、紅葉二色并構物錦繡金銀珠玉之風流、泥繪以色々糸結時花付之等、皆停止之、於貴丹畫當者聽之、隴并瓦卷等裝束可准之云々者、此上近年隨童用長絹狩衣袴之條、甚驚耳目、自今以後、永可令停禁、兼不可着用綾唐綾并紺紫衣之旨、且見于公家新制之狀、尤可守勅制而已、

一 維摩會延年事

巡延年永可令停止、不從公請僧綱之中、或軟掌一寺之執務、或管領數箇之庄園、如斯之人、自昔勅來、早復舊規可令動仕之、但於延年之仁者、衆徒可令評定矣、

一 學侶世俗過分事

觀菩薩師動仕之輩、盃盤奔走之間、殆絕修學之道殊可禁過、次法花會堅義者、還威儀時之捧物并遂行以前巡事等、子細同前、同可令停止矣、

一 五節臺事

元久新制云、五節臺過差同可停止之云々、已上元久 今制同之、

右、於背件條々之輩者、堅任元久新制之罪科、可行其過怠也、彼狀云、於背起請好花美之輩者、御社八講屋之御簾疊敷器具等、常樂會之樂器、櫻繪裝束等、壁器量隨宜可被宛催云々者、如此沙汰、前々唯有起請之名、敢無施行之實、因致、人以不恐世、以無懼、至今度者、且遵行勅制、殊違貴所廣備滿寺、獨可被行件罪科之狀、依衆議、所定如件、

嘉祿二年正月 日

- 五師大法師「成覺」
- 五師大法師「慶圓」
- 五師大法師「圓寛」
- 五師大法師「經眞」
- 五師大法師「長忠」
- 都維那從儀法師「範嚴」
- 都維那法師「定實」
- 都維那從儀法師「宣經」
- 權寺主大法師「圓性」
- 權寺主大法師「滿實」
- 寺主大法師「慶實」
- 寺主威儀師大法師「覺勝」
- 上座 大法師「玄融」

別當前權僧正法印(文圓)大和尚位(花押)
 權別當法印權大僧都(花押)

〔真言1〕
 〔真言2〕
 〔真言3〕
 〔真言4〕
 〔真言5〕
 〔真言6〕
 〔真言7〕
 〔真言8〕
 〔真言9〕
 〔真言10〕
 〔真言11〕
 〔真言12〕
 〔真言13〕
 〔真言14〕
 〔真言15〕
 〔真言16〕
 〔真言17〕
 〔真言18〕
 〔真言19〕
 〔真言20〕
 〔真言21〕
 〔真言22〕
 〔真言23〕
 〔真言24〕
 〔真言25〕
 〔真言26〕
 〔真言27〕
 〔真言28〕
 〔真言29〕
 〔真言30〕
 〔真言31〕
 〔真言32〕
 〔真言33〕
 〔真言34〕
 〔真言35〕
 〔真言36〕
 〔真言37〕
 〔真言38〕
 〔真言39〕
 〔真言40〕
 〔真言41〕
 〔真言42〕
 〔真言43〕
 〔真言44〕
 〔真言45〕
 〔真言46〕
 〔真言47〕
 〔真言48〕
 〔真言49〕
 〔真言50〕
 〔真言51〕
 〔真言52〕
 〔真言53〕
 〔真言54〕
 〔真言55〕
 〔真言56〕
 〔真言57〕
 〔真言58〕
 〔真言59〕
 〔真言60〕
 〔真言61〕
 〔真言62〕
 〔真言63〕
 〔真言64〕
 〔真言65〕
 〔真言66〕
 〔真言67〕
 〔真言68〕
 〔真言69〕
 〔真言70〕
 〔真言71〕
 〔真言72〕
 〔真言73〕
 〔真言74〕
 〔真言75〕
 〔真言76〕
 〔真言77〕
 〔真言78〕
 〔真言79〕
 〔真言80〕
 〔真言81〕
 〔真言82〕
 〔真言83〕
 〔真言84〕
 〔真言85〕
 〔真言86〕
 〔真言87〕
 〔真言88〕
 〔真言89〕
 〔真言90〕
 〔真言91〕
 〔真言92〕
 〔真言93〕
 〔真言94〕
 〔真言95〕
 〔真言96〕
 〔真言97〕
 〔真言98〕
 〔真言99〕
 〔真言100〕

以上を見れば元久新制迄は一尺八寸五分、嘉祿新制よりは二尺二寸の地盤の上に、各種の造花を立て、禽獸鳥類を配し、牛馬や屋形・車を並べ、人形を置いた飾り物を莊嚴として飾っている様が明解である。就中、半泥人形や板人形のみは停止されているという事であれば、奈良人形の様な木彫人形がより具体的に並べられていた可能性が更に高くなる。

若宮祭の始まりは紛れも無く保延二年(一一三六)であるから、興福寺が当初より主催する田楽の飾り物に、造花や人形を用いる事は何の疑いも無い。むしろ常套の飾り物であったに違い無いと思われる。残念ながら田楽花笠等に具体的に人形を用いたとする記述は、『大乗院寺社雜事記』を見る限り、「奈良の人形」でも述べたように長祿元年(一一五七)十月二十七日の条に

一 乘秀五師以定清得業申云、田楽頭事雖不相應、為衆中事闕之由令申間領狀了、仍笛フキノ笠事、御助成候者可畏入之由申、不可有子細之由仰了と記され、同年十一月十三日の条に一當寺田楽頭乘秀五師方ヨリ、笛吹笠事令申間用意之、檜物師方下行二十正遣之、造花代且三十正下行之

とある。つまり、製作には「檜物師」が携わり、造花を添えたものであった事は確認出来るものの、はっきりとした人形の記述は無い。人形の記述が明確に伺えるのは文明十七年(一一八五)十一月廿五日の条で更に三五〇年を下る。

故に現在までは、奈良人形の起こりを祭礼始行と同年と考えるのは大胆な試論であり、伝説的始原といふべきであった。しかし、本稿で

つまりこの文書は、興福寺大衆が華美にわたる法会や調度・衣服・乗物にいたる迄を、別会五師以下が衆議の上「嘉祿の新制」を定めて、別当に起請したもので、嘉祿二年(一一二六)正月に新制を定め、それは「元久の新制」(一一二〇四〜一一二〇六)に照らして定められたものである事が内容により判明する。更にこれらに先行する「建久の新制」(一一九〇〜一一九九)「文治年中八箇條起請」(一一八五〜一一九〇)「治承之新制」(一一七七〜一一八一)なるものが存在している、度重なる制約を課し、華美を戒めたのであろう。従ってここに記す法会の莊嚴の内容も、おおむね治承年間迄溯り得ると考えても差支えなからうと思われる。

さてそこで最も注目すべきは、「東西金堂修正修二月造花過差事」とある一条で、東西両金堂における修正会、修二会の仏前莊嚴に用いる、造花と牛馬人形と、屋形や車の内容を規定した条目である。(以下筆者訓下)「一、瓶風流ノ中、牛馬人形合せて三鉢ヲ過グルベカラズ、兼テ屋形車各一ツニ限ル可シ、二ツ・三ツニ及ブベカラズ、細々ノ禽獸鳥類等ハ、制限アラズ、己上元久今制ニ云ウ、木花ノ長サハ三尺、草花ハ二尺、之ヲ以テ至極タルベシ、又三種ニ至ル桜ナラビニ梅・萩・薔薇・款冬ハ、下草有ルベカラズ、兼テ十二種ヲ以テ本花トシ、下草ヲ用ウベカラズ、但シ椿・松・柳・鶏冠・木竹細々ノ草花ノ類、下草ヲ用ウル事任意タルベシ、次ニ屋形ハ、棟ニツヲ過グベカラズ、造繼ヲ以テ一宇ト号スノ条、更ニ其ノ限り無シ、縦工造繼ト雖モ、縦工各別ト雖モ、唯論ズベク之ヲ切レ、大小何軒ノ棟ノ離合ト謂、仍チ一向ニ棟ニツニ限ルベキ也、又二階屋ハ同ジク停止スベシ、次ニ牛馬人形ハ合シテ四鉢ヲ超ユベカラズ、元久新制ハ三ツ也、而今度ハ四ツヲ聽ス、人形ノ長サ広サノ定ハ三寸、牛馬ハ之ニ准ヘ、半土人形、板人形ハ各之ヲ停止ス、地盤ノ広サ元久ハ一尺八寸五分今ノ広サハ二尺二寸」

紹介した記録は、奈良人形の始原を保延迄溯つても可能と考えられるべき有力な証拠とすべきであろう。

(松寿の謎)

奈良人形の祖ともいふべき檜物師の系累を相続する檜物屋右衛門太郎事、岡野松寿家十三代の作品の特定は至難であり、「奈良の人形」において、筆者は「保伯」と明らかに読める捺印がある作品(写真資料①②)を保伯と仮定し、次に「耻」の刻銘ある作品を保久とする伝承から、松寿作品の解明を試みてきたが、ここに至ってそれらをすべて覆す史料が発見されたので、松寿作品解明の段階として敢て発表することとした。

まず「十牛之香盒」(写真資料③④⑤)について、柳生藩家老小山田主鈴直系の子孫、小山田晟氏より承れば、小山田主鈴(幼名彌一郎)が還暦祝の音物として、岡野松寿に十牛の香盒の製作を依頼し、同家にも一つ保管されている由。そこで小山田家を調査すると、主鈴は天明元年の生まれで、安政三年十一月十三日に七十六歳で没している。つまり還暦は天保十一年である。となると十代保久は文政八年に四十二歳で没しているが、虚弱で妻も娶らず大作傑作は余り作らなかつたと竹林氏が指摘されている事からして、むしろ勉強熱心で彫刻や絵画に優れていたと評せられる、惟孝(恒徳の弟)即ち十二代松寿が作者と目せられる。そこでもう一点、このたび新に発見した中村雅真家旧蔵の「興福寺北田堂鬼瓦香盒」(写真資料⑥⑦⑧)を調べてみると、箱書等に年号は無いものの、中村雅真の父中村玄盛宛の制作費領収書(価は壹歩)(写真資料⑨)が箱中に遺されていた。早速、白鶴美術館(価は壹歩)の海原靖子芸員に御教示を乞うと、中村玄盛は文政四年二月二十六

日生で明治三十一年四月二十六日に七十八歳で没し、維新後は堯園を名乗るが、維新前迄は専ら玄盛を名乗っていた由、そうなる、明治十七年に六十一歳で他界する惟孝が刻したものととしてよさそうである。加えてこれら一連の作品に刻された花押は、すべて〇であり、(写真資料⑤⑧⑪) 今迄私が保伯としていた花押は惟孝である事となる。加えて保伯の印を、惟孝も用いていたという事実も判明する。(写真資料②⑧) ならばもう一点、同花押が刻されている世に「八雷神香盒(元興寺古材にて製作)」(写真資料⑩⑪⑬) は、所謂、元興寺元興神の面相を刻した香盒で、この箱書には、父の刻した物に底を自らが補うとある。(写真資料⑫) ならばこの香盒の作者は惟孝の父、保久であることになる。更に近年保久署名のある高砂の掛額(写真資料⑮⑯⑰) を発見したのでこれも写真で御紹介しておこうと思う。これで惟孝作品の決定がなされ且つ保久の作品の認定(写真資料⑭) も、緒についたといえよう。

まだまだ松寿の作品は謎に満ちているが、一つ一つその解明を心がけていくしか方法は無い。以上経過報告とする。

(本稿の成稿については中田夕子君の労を相煩わした)

(春日大社権宮司)

(写真資料) 写真撮影は帝塚山大学大学院の駒井優子君・刀禰都未君・有水啓太君の労を多とする。



①松寿作伏鹿香盒



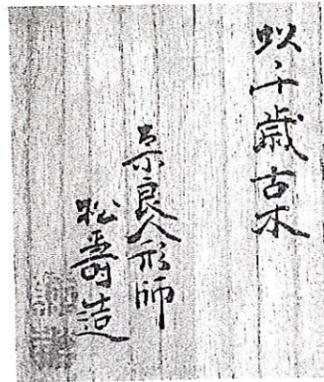
②刻銘



③伏鹿香盒の箱書 保伯とあきらかに確認出来る印と署名



④松寿作十牛香盒

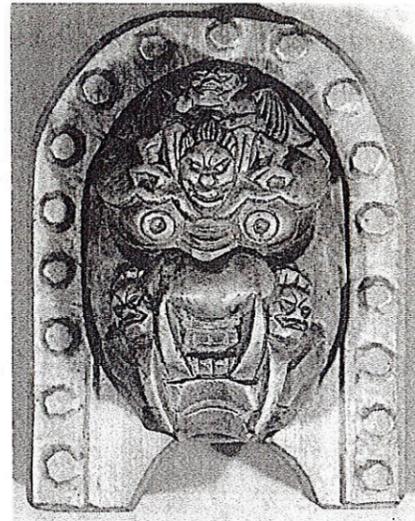
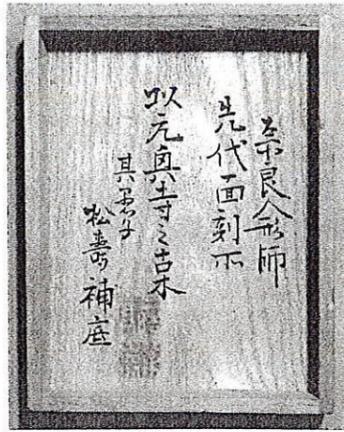


⑤十牛香盒の箱書 ③と同筆であることが確認できる



⑥十牛香盒の刻銘と花押

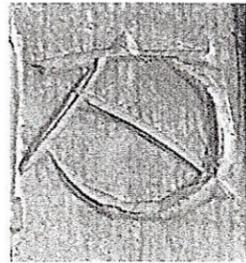
⑬同箱書
 「奈良人形師
 先代面刻所
 以元興寺之古木
 其愚子
 松壽補底」



⑪松壽作八雷神(元興神)香盒
 (但し蓋部は根付仕立て)



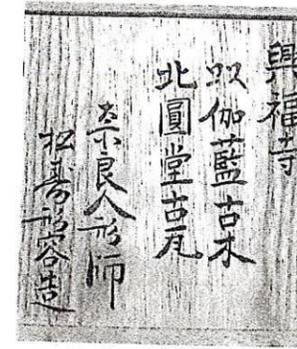
⑭松壽(保久)刻銘 蓋部の刻銘



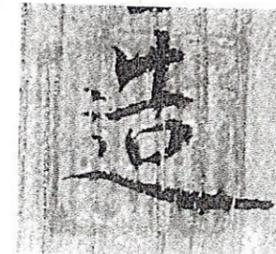
⑫底部の刻印



⑨松壽作興福寺北円堂鬼瓦の香盒と花押



⑧松壽作興福寺北円堂鬼瓦の香盒の箱書

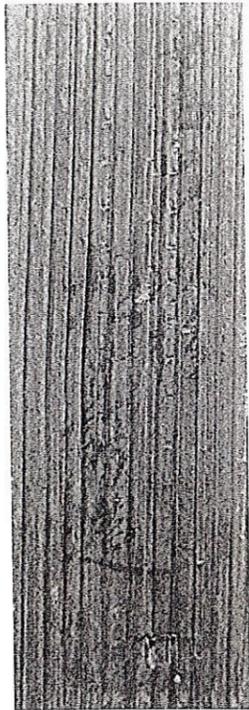


⑩の印(保伯)

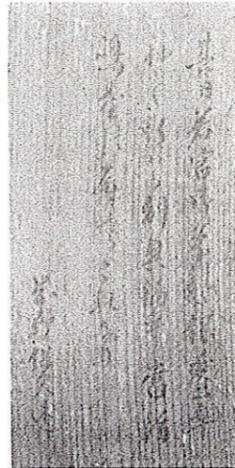


⑦松壽作興福寺北円堂鬼瓦の香盒

⑰同作表面墨書
 「蓋嶺以杉
 松壽造(印)」

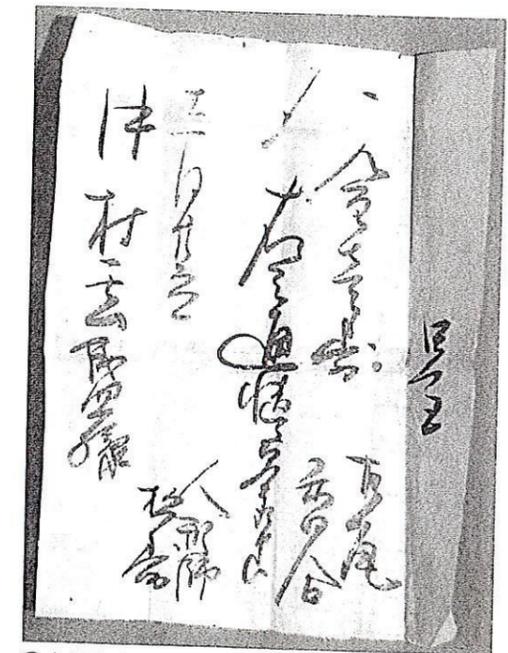


⑱同作裏面墨書
 「春日若宮御祭礼八保延二年
 初テ行ハる則興福寺曾防
 嶋臺尉姥これなり
 岡野保久述」



⑮松壽(保久)作高砂掛額

覚
 一、金老歩 古瓦
 香合
 右之通髓ニ受取申候
 人形師 松壽
 十二月廿六日
 中村玄盛 様



⑩中村玄盛宛松壽領収証

奈良の人形(IV)

—奥田木白の奈良人形写し—

(はじめに)

奈良には「赤膚焼」という焼物がある。その淵源は祭祀用の土器より始まり、中世以降は生活雑器をも併せ造り、近世になって茶陶を生産するに至った。就中名工の誉高く、意匠に抜群の才を発揮したのが、幕末から明治初年に活躍した奥田木白という人である。木白によって赤膚の名声があがったことは間違いの無い事実である。

本論では今迄誰も注目することが無かった木白の造った人形、奈良人形の風趣を焼物で表現しようとした「赤膚焼奈良人形写し」について紹介してみたいと思う。

(赤膚焼の歴史)

赤膚焼の歴史は未だ解明されていない。

古くからその起源は土師氏の製陶に求めている。その故は『日本書紀』「垂仁紀」の埴輪の記事(拙稿「奈良の人形」日本人形玩具学会誌第十五号 参照)を根拠とし、更に『続日本紀』第廿六、光仁天皇、天応元年六月壬子条に

遠江ノ介從五位下土師ノ宿禰古人、散位外從五位下土師ノ宿禰道長等一十五人言ス、土師ノ之先ハ、出レリ自ニ天穗日命一、其ノ十四世ノ孫、名ヲ曰フ野見ノ宿禰ト、昔者總向珠城宮 御宇 垂仁天皇ノ世、古風

岡本彰夫

尚ホ存シテ、葬礼無レシ節、毎レ有ニ凶事一、例多ク、殉埋ム、于レ時皇后薨スルトキ、梓宮在リ庭ニ、帝顧ニ問シテ群臣ニ曰、後宮ノ葬礼、為レ之ヲ奈何ム、群臣対テ曰、一ハラ違ニハムヤトヒテ、倭彦王子ノ故事ニ、時ニ臣等遠祖野見ノ宿禰進ミ奏シテ曰、如クムハ臣ガ愚意ノ、殉埋之礼ハ、殊ニ乖レリ仁政ニ、非ニ益レ国ヲ利スル人ノ道ニ、仍テ率ニ土部三百余人ヲ、自ラ領シテ取レ、埴、造テ諸物ノ象ヲ進ル之ヲ、帝覽シテ甚ク悦テ、以テ代フ殉人一ニ、号シテ曰ニ埴輪ト、所謂立物是也、此即チ往帝之仁徳、先臣之遺愛、垂ニテ裕ヲ後昆ニ、生民頼レリ矣、式モテ、覲ニ祖業ヲ一、吉凶相ヒ半ニシテ、若シ其諱辰ニハ掌リ凶ヲ、祭日ニハ預ルガ吉ニ、如レ此ノ供奉シテ、允トニ合ヘリ通途一、今ハ則不レ然ラ、専ラ預ニ凶儀ニ、尋ニ一念スルニ祖業ヲ、意不レ在ラ茲ニ、望ミ請フ、因リ居地ノ名ニ改テ土師ヲ以テ為ニ菅原ノ姓ト、勅依レテ請ニ許ス之ヲ

要約すれば土師宿禰古人や道長ら十五人が申し上げるには、天穗日命の末裔である野見宿禰は、垂仁天皇の御代には古例に依って殉死の制があった。皇后日葉酢媛が亡くなられた殯宮の庭で、天皇は皇后の葬礼をいかに取り計らうべきかを下問になった。多くの臣らは倭彦王子(天皇の同母弟)の葬礼になされたように殉葬をお勧めした。その時に我らが先祖である野見宿禰は、このようにむごい事は、天皇の心あたたかい政事にさからい、国を益する事も人を利する事も出来

ませんと申し上げ、自ら三百人の土部を率いて埴土を採り、色々な物を造り上げて、帝にお見せしたところ、いたくお悦びになり、殉死する人に代えてこれらの造り物を用いることになされ、埴輪と名付けられた。これがいわゆる立物のことである。さてそこで思いをめぐらすに、元来我々の先祖は凶札に当っては凶事を行い、祭日に当っては吉事を行ってきたのに、現今は専ら凶事に携るのみとなってしまいました。これでは祖先の意に叶わぬことになってしまいます故、土師の名を改めて、居住地菅原の名を乗らせて下さいと願うので、光仁天皇はこれを勅許あそばされた。という記事である。

これを見ても埴輪の成立が史実に即さず、土師氏の伝承にとどまるとしても大和国添下郡伏見菅原（現奈良市西大寺とその南方の赤膚山に至る一帯）周辺は良質の陶土が採取出来る地として、土師氏が蟠踞していたことは事実である。

この土師器製作の時代より中世、興福寺の管轄下「西京赤白土器座」（春日大社では祭事に依る区別や社家の区別によって赤土器と白土器を使い分けるため、赤白の土器を必要とした。）が生産活動を行い、副収入として、羽釜や炮烙の生産まで行っていたことは発掘調査を見てもあきらかである。これらの時代を赤膚焼の「古窯」と認識する考え方がある。

ではその次の時代はと言うと「旧窯」といい、これは嘉永七年（一八五四）に田内梅軒が著した『陶器考』に赤膚焼は「遠州好七窯ノ内」とし「遠州時代ハ赤ハタ山ノ池土ヲ以テ造ル」と記す。いわゆる赤膚は遠州七窯の一つで、その焼成には小堀遠州が深くかかわったとする。

また伊勢田丸藩の家老を勤めた、金森得水の『本朝陶器攷證』（安政三年一八五六年刊）には「一天正慶長の頃、大和納言秀長卿思召

能な文献であるから長文ながらその全文を掲出しておこう。

陶工木白

赤膚焼は大和生駒郡大字五條の赤膚山にて製する陶器にして天正年間大和納言豊臣秀長、尾張常滑の陶工與九郎といふものに窯を開かせたるに起るといふ本朝陶器攷證爾後沿革の詳なるを知る能はざれどもこれと関係ある工人に野々村仁清、治兵衛、伊之助、木白の数者あり、俗に小堀遠州七窯の一といふ。陶器考或は正保年間野々村仁清京都より来りて窯を開きしとも陶器類聚及び日本陶器全書の一説或は治兵衛といふもの京都より来りて開きしとも本朝陶器攷證いひ、或は伊之助、次兵衛は瀬戸の工人にして寛政年間郡山城主柳澤堯山これを再興せる時招き寄せたるものなりともいふ陶器考日本陶器全書、陶器全書には二人の姓を加藤とせり木白は即ち近世の名工にして今茲に記さんとする主人公なり。

木白九代以前の祖先は弘治年間大和国平群郡法隆寺西里の田邊小路に住し宮家御用大工職を勤め苗字を免され奥野助次郎と呼びしが其の後逼塞に及び六代目は和州小泉藩の家来となり御先手株を求め奥野武兵衛と改名す。其の子即ち七代目は郡山柳町柏屋方に奉公して滞なく勤め廿三歳より親里に帰り小間物商を営み、宝曆八年郡山堺町にて家を借りしが明和三年に至り、これを求めて遂にこの地の住民となれり。（今の大政の家なり）これを郡山の初代とす。二代武兵衛の時苗字を拝領し奥田氏を名乗り御上の御用向相勤む。陶工木白は即ち其三代にして寛政十二年に生れ幼名を亀松といひ中年佐兵衛と呼びしが天保元年正月（三十一歳）家督を相続して武兵衛と改名せり。木白は俳名にして家号柏屋の柏の字を二分して名づけたるなり。平素茶を嗜み天保六年（三十六歳）より始めて慰に楽焼を製しそれより三年の間に大茶碗五個を

にて、尾州常滑村より與九郎と申者御召よせ、甕相立焼はじめ、其後京都より治兵衛と云焼物師下りて焼立、夫より近來松平甲斐守榊御隠居堯山翁、内々御世話有之候よし、何事やらん度々留甕に相成候よし、甕元は添下郡五條村と申所にて土も五條山より取り候との事、其外委敷事は分りかたく候」と記している。

確証は無いが、豊臣秀吉の異母弟、大和納言秀長が常滑から陶工與九郎を呼び寄せて窯を築かせたのが赤膚焼であるとす。また小堀遠州がこの窯に係わったとする考え方もあり赤膚を遠州七窯の一つとしている。これを「旧窯」とする。

その後、郡山城主となった柳澤吉保の子、吉里（享保九年（一七二四）甲府より転封）の孫である保光（隠居後堯山と名乗る）が内々に世話をし、寛政年間頃に再興した焼物を「新窯」とする。これが現在の赤膚焼に直結する窯なのである。堯山侯は世に名高き茶人大名で、新窯は茶陶専門の窯として生まれたと言つてよい。故に赤膚焼は何を焼いてもよい窯で、楽も備前も高取も、そして高麗物の写しまで手がけたのである。よって私は赤膚焼の事を、焼物の八宗兼学だと説明することにしている。

（名工奥田木白）

赤膚焼の名を高からしめた人は奥田木白である。木白は生来の陶工ではなく、郡山藩の御用商人の息子で、柏屋武兵衛と称し、俳名として屋号の柏を二つに分けて木白と名乗ったのである。

木白の伝記は大正十年に当時奈良女子高等師範学校の教授であった、水木要太郎（十五堂）のものした『陶工木白伝』が最も信頼出来る物で、木白没後五十余年、その子孫も知己も存命中に認めたものであるから、基本中の基本資料と言える。しかし現在ほとんど入手不可四季に譬へて製しこれを西大寺に寄贈したるが其の後には年々正月十六日の大茶湯に使用せられたり今現存するもの是なり。天保十年七月四十歳の時より南都の重兵衛周齋に金銀絵、錦絵等の法を伝え翌十一年（四十一歳）秋の末より赤膚山釜元伊之助方へ少々焼物を依頼せしを始めとして次第に夫々へ頼み込み程なく諸方へ売捌くやうにもなりしかば自然に諸方よりの注文も来りて家業の如くになり嘉永三年初夏（五十一歳）には江戸に下り四五軒引き合ひて注文を受け五月に帰国したるほど佐久兵衛に製陶の業も漸次盛大になりしを知るべし。其の製作せるもの頗る雅致あり篋使の如き極めて力つよきもの少からず。

子作次郎は文政九年木白二十七歳の時に生れ幼名を辰次郎後に佐久兵衛俳名を木左といひしが亦父に習ひて陶器を製し陶印等皆父子同一のものを用ひたれば世に二代木白と称せり。天性器用にして技術父に勝り和韓各種の茶器を摸倣して巧妙なるもの却てこの人の作品に多し。現に此の家に残れる看板の額にも「摸物類、瀬戸、松本萩、唐津、高取、青磁人形手、御本半使、南蛮并楽焼類、木白」とあり。普通の品には多く萩薬を用ひたれど仁清を摸したるもの、如き頗る優美にして真に逼るものあり其技術に熱心なる能人の如きは奈良春日後日能、興福寺新能等を写生して色取まで細に記しおきこれによりて製作したりといふ、当時狂歌師嘯月「陶器師木白が奈良人形を写し香合に作りければ」と題して「青丹よし奈良はぬ事をたくみ出し香合にして名は匂ふなり」の咏あり。其の釉薬に苦心したる痕跡は家伝、釉薬調合法に前記看板に記されたる外、仁清、朝鮮、黄瀬戸、織部、生瀬、備前緋襷、相馬、黄伊羅保等多様なを以て知るべく陶土の撰択にも心を用ひ萩薬の調査には正田山生駒郡伏見村より出づる白土にして春日祭礼に用ふるも

のを用ひ、万延元年より自分の考案にてこの土に石扇に葉の字を合せてセキと読ませたる或は仁清地の土拵には奥柳の土生駒郡 都路村四貫目に矢田土生駒郡 矢田村三貫目靈山寺土生駒郡 霊山寺三貫目を調合したるなど佐久兵衛 手記工夫研究に力を用ひたるを知るべし。自宅に轆轤を据ゑ下職を用ひ自ら仕上げをしたれど窯を持ちたるにはあらねば赤膚山にては皆伊之助の窯にて焼きたり。当時赤膚山に三つの窯あり、東は甚次郎、西は惣兵衛といふ。伊之助は其の中にありし窯なり。併楽焼焼付などは自宅にても製したれば錦窯の断片に

安政二卯年六月新調之

安政四年の

楽焼はわれの力も及ぶまじ

地水火風の恵なりけり

木 白 造

等の彫刻銘あるもの数種あり。製作品は多く大阪西横堀天満屋喜兵衛、淡路町布屋利兵衛等の店にて捌き江戸出ししたるも多かりしといふ。

木白の歿したるは明治四年二月十三日にして年を享くる七十二法名を圓山木白禪定門といふ。作次郎は明治十二年六月廿五日五十四歳を以て歿し法名を静薫木左禪定門といふ。墓は郡山矢田町の圓融寺にありて碑の正側面には木白父子三代の法名を列べせり。

父子共に画も書き俳句も作り風流好事より出発したる技芸なれば自ら気品も高く技術の妙を得るに至りしなるべく聞く所によれば京都某茶道の家元にては新年の茶会に木白作十二支の香合を交るゝ用ふるを例とすといふ。かく世に賞翫せらるゝに至りしも始めはこれが技術の価値を認むるものも少ければ嘉永三年江戸に至りし折も宗三宗匠といふよりは茶器、薬玉等数種の注文を受けた

から木白と木佐作品の見分けは、未だ結論が出ておらず、記年銘の作品が出現せぬ限り全く見当もつかない。一部には木佐改印説もあるようだが、これとてもはつきりとした文献が発見されている訳でもなし、想像の或を脱し切れない。

(木白の奈良人形写)

木白は自ら作陶も絵付けも行つてはいるものの、轆轤は上手にまかせ、絵付けも上等の物は委託し、窯は赤膚山の伊之助に焼かせたというから、本人は意匠や総合的なプロデュースを行っていたと考えられる。故に「木白工房」の存在を認知しておかねばならない。

この木白はまた大変研究熱心で、赤膚焼新窯の伝統ともいふべき、各種模物を看板に掲げているが故に、土や釉薬には殊に意を尽くし、近隣の土を調べ、春日若宮の祭礼において、御仮殿の壁に塗る「白土」(伏見正田村より産出)を用いて「礫」(せき)なる釉薬まで案出し、これが赤膚焼特有の「並釉」となった程である。

この木白が更に意を尽くしたものは、雅味ある奈良人形の造形を焼物で表現しようとした事である。

伝記に「其技術に熱心なる能人形の如きは奈良春日後日能、興福寺新能にて色取まで細に記しおきこれによりて製作したりといふ」と伝えられている如く、かなりの研究を重ねていたようで、大変素晴らしい作品が伝存している。木白在世時の奈良人形の巧者は十二代松寿惟孝(明治十七年没六十一歳)と氣鋭の森川杜園(明治二十七年七十五歳没)の活躍期に相当しており、両者との直接の交流は確認されていないものの、木白はこれらの人々の作品を念頭に置いて製作したであろう事は想像に難くない。

木白の作品は能人形香盒をはじめ、槌や海老の熨斗鎮、能人形置

るが尾張町橋屋といふ鑄道具屋よりの注文は印なしとの約束なりき。近頃に至りては漸く一般に其の非凡なりし技倆を認められこれが作品の蒐集に力を尽す人も出でて来て価格も暴騰するに至り偽物の製作亦多く出づるに至れり。木白の家の近隣に大阪屋太七(号沁齋)小西三郎兵衛などいふあり亦茶を嗜み共に楽焼の製作等を樂み交情最も深かりしといふ。作太郎の妻の姪は九歳の時より養女となり養子を迎へて家を継ぎしが今猶生存して六十八歳となれり。

笠置にて

木 白

さして行吾妻の方や啼雲雀

文月中の三日南都黒門前にて

呼出しの人も帰るや魂祭

大正十年十月

水木十五堂識

(木白と木佐)

先の伝記にもあったように父木白とその子木佐について述べておきたい。

木佐は弱年より父の製陶を手伝っていたであろうことは、間違いない。むしろ父親より技倆にすぐれ「天性器用にして技術父に勝り和韓各種の茶器を模倣して巧妙なるもの却てこの人の作品に多し」とある通り、一群の木白作品を見る時に、良く言えば木白の雅味、強いていえば泥臭さ、田舎臭い作品とは別に、紛れも無い木白印を用いた作品群の中に、一際品格のある品々の一群があることは事実である。強いていうならば前者を父木白の作、後者を木佐の作と考えてみる事も出来るのではないかと思つてゐる。

木白は明治四年に没し、木佐は十二年だから全く木佐が単独で活動した時期は最低八年しかない。しかも父と同じ陶印を用いたと伝える

物などが代表作として上げられる。変わった造形の置物では狂言のうつぼ猿の三つ一組の人形が夙に有名だが、真作か否かは疑義がある。

また木白の名が知られるにつけ、その偽物も作り出され、管見では京都の春峰なる人が作った上出来の人形贗物があるし、他に一見して分別がつく、稚拙な贗物人形もまま実見される。

それから茶釜なども一見鉄かと思まがうばかりの作品があり、木白・木佐父子の高い技量と見識は今後更に見直して行く必要がある。

(その後の奈良人形写)

木白・木佐父子没後の奈良人形写は、熱心な工人がおらず、初代松田正柏の窯に徳田某という細工師がいて、大層素晴らしい人形を作っていたが、リアルな作品が多く、奈良人形を念頭に於いて作成した物ではない。二代正柏も香盒などに見るべき細工物があるが、これとて奈良人形を意識した物ではないから木白が案出した雅味ある奈良人形写は断絶したかの如く思われたが、近年尾西楽齋(啓至)が、奈良人形師土井志清と木白式の岩絵具を用いた、奈良人形写の香盒を製作するようになったのが楽しみである。

(春日大社権宮司)



翁人形 面部



木白 翁人形



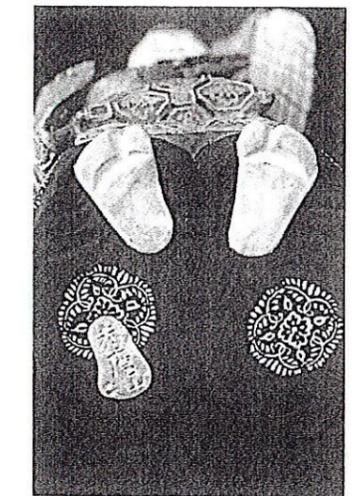
木白 邯鄲人形



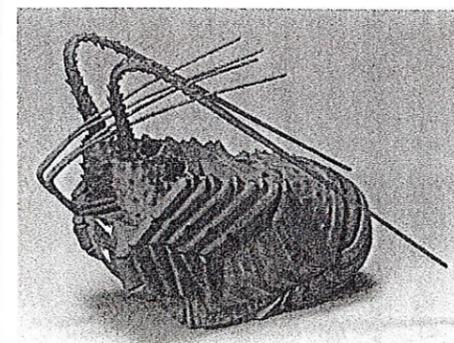
木白 能人形香盒



翁人形 木白箱書



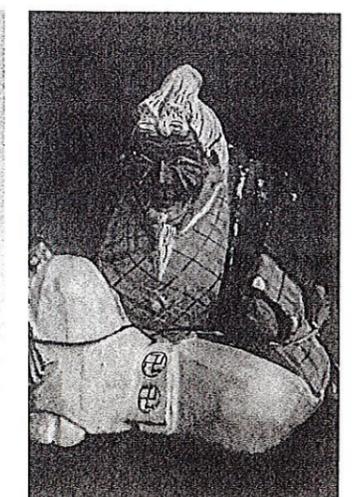
翁人形 銘



木白 海老熨斗鎮



木白 (木佐力) 御福香盒



木白 高砂尉大香盒

論文

奈良の人形 (V)

—奈良人形拾遺—

岡本彰夫

① 松壽保伯の作品について

かねてより松壽作品の特定については、試行錯誤を繰り返しているところであるが、今回記年銘のある作品を入手したので、松壽作品の資料としてご紹介しあげておきたいと思う。

先行研究によると、まず松壽十三代の中で初代より八代迄は落款・刻銘等の例がなく、九代松壽つまり「保伯」より銘を入れたという事。十代「保久」は作品に「耻」「恥」の異体字を用いたということ。これらは「奈良の一刀彫」(昭和五十二年刊・私家版)において竹林薫風氏が述べておられる。

因みに九代保伯は文化七(一八一〇)年没 七十一歳・十代保久、文政八(一八二五)年没五十八歳・十一代恒徳、天保十四(一八四三)年没四十二歳・十二代惟孝(恒徳弟)、明治十七(一八八四)年没六十一歳・十三代保徳、明治三十四(一九〇二)年没五十五歳である。この度発見した松壽作品の箱書には、

攝津国本成郡大阪大手通り

森本屋清兵衛

悴浅之助

初節句之祝トシテ

奈良實父

花岡惣太夫松壽

刻之也

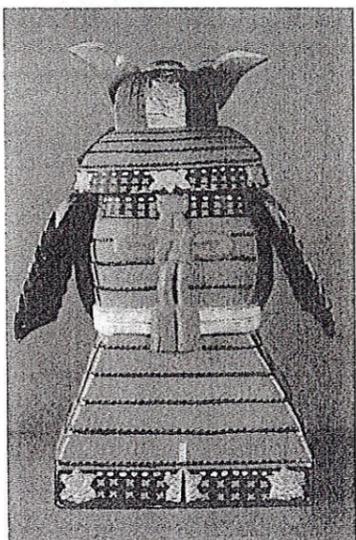
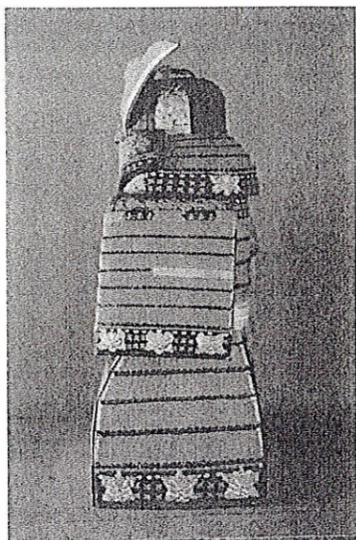
享和三年^{癸卯}四月

とある。つまりこれは甲冑を刻した物であり、箱書にある通り孫の初節句のために親元より贈呈された品である。

享和三(一八〇三)年四月に、攝津国東成郡の大坂の町で大手通りに住む、森本屋清兵衛の子供である浅之助の初節句の祝品として主人の実父か妻の実父かは不明だが、実父の花岡惣太夫が、松壽に刻させて贈答した品であることがわかる。

享和三年といえ、九代保伯は六十四歳、十代保久は三十六歳に相当する。因より松壽家は家職として伝承したのか、保伯と刻した印を代々使用しているし、「二暗亭」という名も九代が名乗ったものを、各代が用いているから、保伯・保久・恒徳というような、名乗りと年号がない限り、区別がつけられないというのが実情だ。代々はほとんど松壽と誌し且つ刻するからかような難問が生ずる訳なのである。ところで本作は保伯自らが刻した物であるのか、息子の保久に委ね

写真上段右より箱書・正面・底部・側面・後面・全体



た物であるのかの特定は確証が無い。

しかし息子保久の作品の特徴は、一刀で刻した様な風合いの技法が濃厚であることからすれば、本作品は、まことにゆるやかな一刀彫であって、丸彫りといわゆる一刀彫の彫法の中程に位置するものと言える。

そこで筆者は、この作品が十代保久の作柄と明らかに異なる物であることと、記年銘からして、これを保伯作品として紹介するものである。

(以下写真)

本体法量 高さ四十一センチ

幅 二十七センチ

奥行 十五センチ

② 杜園の春日絵師職について

杜園はしばしば、絵画の落款に「春日繪師」もしくは「春日繪師職」という職名を用いている。

この件については春日若宮祭（おんまつり）の際に、執行される「大宿所」における「大和士」の神事において、神前に飾られる「大宿所前繪馬」の揮毫を託された。このことについて、杜園が後年繪馬裏に記した銘文を示しておこう。

年々此通りニ 繪馬新調シ
春日若宮御祭ニ 餅飯殿町
大宿所へ 相納メ 同所ヨリ 下行米
五斗^キ 吉羽^ツ 戴来^リ
候事数年之むかしより不変
之処御一新^{ヨリ} 被廢候也
依之^モ 森川氏ハ 春日有職^{ナリ} ヘシ

中新屋町
森川杜園

とある。筆者はかつてこの銘文のみが存在する事から、町代の意向のままに杜園に託したものであって、春日・興福寺の関与せぬことで、且つ繪所は存在しても、絵師職という称は無かったこともあって、全くこの名称は私称であるに違いないと断じた。

しかし、平成二十五年十二月七日から奈良国立博物館において開催された、「おん祭と春日信仰の美術」展に出陳された、「森川杜園大宿所絵師願」（天理大学附属天理図書館）の存在を知った。

その内容は
書付を以奉申上候

以来「奈良町」の担当とされた。当然奈良奉行所が監督するのであるが、実際の切り盛りは「賄」と称して、奈良町代がその責を負うたのである。

そもそも奈良町の自治組織は、「惣年寄」である、清水・石井・徳田・西村の四家が家職として世襲し、町を代表した。その下に五人の「町代」が存在し、内二人が「上町代」で三人が「下町代」として上町代を補佐した。二人の上町代は、おおよそ奈良町を南北に分けて庶務を担当した。後に町数も増えて変遷を経たが、北方七六町は高木又兵衛が、南方八十町を半田理介が預かったのである。上町代は一年毎に交替したゆえに、大宿所賄も高木と半田両家が隔年で分担した。

杜園の願書を見ると、「大宿所絵師職」なる職名があつて、この職の監督は上町代であつた事が知れる。この職は大和士が神前の御簾に掲げた「大宿所前繪馬」の揮毫が主とした役目であつた。この絵師職の株が存在した事は明白で、安政四年に病気を理由にこの職を譲ることになったのは雑司町の政八なる人物であり、これを譲り受けたのは森川杜園であつた。差出先は奈良町代高木又兵衛となつている。以後杜園は「春日絵師職」を名乗つたのである。

成稿に当り、塩島あゆ子・桂修平（撮影）両氏の助力を得た。

（奈良県立大学客員教授・本会運営委員）

一 春日若宮御祭禮大宿所繪師職之儀
年々下行米五斗被下右職相勤罷在候処近年
病氣^ニ 相勤かたく^ニ 右繪師職之儀中
新屋町繪師杜園^ニ 譲^リ 度候間右杜園^ニ
被仰付被下度双方連印^ヲ 以御願奉申上候
右御聞濟被成下候ハ、忝可奉存候以上

安政四^ニ 年 雜司村
十一月 譲^リ 主 政八^⑧
中之新屋町
譲^リ 受主 杜園^⑨

高木又兵衛殿

というものである。

そもそも大宿所というのは、若宮祭執行に当り、流鏑馬を勤仕する「大和士」と呼ばれた武士団が、前以て精進潔斎を行うために、「奈良入り」した際の籠り屋である。

かつて大和士は六党（長川・長谷川・平田・葛上・乾脇・散在）を数えたが、豊臣秀吉以来大和国外へ放逐され、わずかに長谷川党・長川党・乾脇党が奉仕する事となった。現在の大宿所（現・奈良市餅飯殿町）は豊臣秀長（秀吉の異母弟）の命により、奈良奉行井上源吾が、興福寺の子院であつた遍照院跡を大宿所に充てさせたと伝わる（それは六党それぞれが大宿所を構えた）。

ここでは厳格な神事や故実が守られ、それらを執行するのが、大和士であつて、これら一連の行事を扶け、財政的支援をするのが、近世

技熟達し、主として貿易品の彫刻をやり、関西有数の名家となったが翁に先だつこと二年、明治二十五年六月二十日三十七歳で歿し、翁の家を継ぐものが現存せないことは誠に淋しい極みである。

紀元二千六百年を記念して瀬谷梅源氏蒐集の奈良人形史料たる大阪朝日新聞記事を依頼に依り集録す

従六位 雪山 田原昌雄

印 印

(後書) 本稿作成にあたり本会の幡鎌真理氏には多大なご尽力を辱うしたことを御紹介し、深甚なる謝意を表させて頂く。
(春日大社 権宮司)

見て、触れて、体験できる「おもちゃ」のテーマパーク

おもちゃ王国

みんがで遊びにおいでよ!!

毎日イベント開催!
ハローキティやしまじろうたちが、遊びにやってくるよ!
おもちゃ王国の王様と仲間たちも、毎日お出迎え!

パビリオン
おもちゃで自由に遊べる18種類のパビリオン

のりもの・遊具
楽しさあふれる20種類のアトラクション

トイズスタジオ
おもちゃにおみやげ、ファンシーグッズが並ぶ、子供たちの宝箱

飲食
バラエティ豊かなメニューを取り揃えた、各種飲食・喫茶スペース

営業案内
●営業時間/10:00~17:00
●休園日/毎週火曜日
●入園料/大人700円・小人500円
(大人/中学生以上・小人/3才~小学生まで)

TEL(0863)71-4488
〒706-0153 岡山県玉野市滝1640-1
ホームページ
<http://www.omochooukoku.co.jp>
iモード用
<http://www.omochooukoku.co.jp/i>

ダイヤブロックワールド レッツゴートーマス 冒険プレイジム